

特別支援教育研究論文集

—平成25年度 特別支援教育研究助成事業—

研究協力：国立特別支援教育総合研究所

吃音のある児童の指導に関する実践的研究
～開発教材の活用と有効性の検討～



瀧田 智子（東京都江東区立南陽小学校 主任教諭）
町井 敦子（神奈川県小田原市立新玉小学校 教諭）
河合 美幸（東京都江戸川区立清新第一小学校 教諭）

平成26年3月

公益財団法人 みずほ教育福祉財団

目 次

まえがき	1
概要	2
第1章 研究の主旨	3
吃音指導の現状と研究の課題	3
第2章 研究の方法	4
1 アンケート調査	4
2 教材の活用事例	4
第3章 アンケート調査の結果と考察	5
1 回答者のプロフィール	5
1) 回答者の所属	5
2) 回答者の言語指導の経験年数	5
3) 現在および過去に担当した子どもの数	5
4) 吃音指導についての印象とその理由	6
2 アンケート調査の結果と考察	7
1) 選択肢による回答結果	7
(1)教材の使用の仕方	7
(2)教材の使用後の効果	8
(3)教材を使った感想	9
2) 自由記述による回答結果	10
(1)『どもってもいいんだよ』	10
(2)『どもるってどんなこと』	12
(3)『中学生になるきみへ』	14
(4)『すごく!すごろく』	16
(5)今後必要とする教材や開発を期待する教材	18
3) 調査結果の総合的考察	20
(1)使用後の効果	20
(2)使用後の評価(感想)	21
(3)教材の活用についての課題	21
第4章 教材の活用事例	22
第5章 まとめと今後の課題	26
1 教材の有効性について	26
2 それぞれの教材の効果と子どもの反応から	26
3 吃音の指導者に関して	27
4 今後の吃音指導の在り方をめぐって	27
参考文献	29
資料	30
1 作成した4種の教材の目的と概要	30
2 実施したアンケート用紙	34
3 アンケートに回答された自由記述の一部	37

まえがき

平成23年度の文部科学省等の資料⁽³⁷⁾⁽³⁸⁾では、全国で約3万人の児童が「ことばの教室」等の通級指導教室において指導を受けており、その約1割が吃音のある子どもであるといわれています。

吃音の指導については、これまで、吃音を意識させることで、その症状が固定化したり、あるいは、悪化したりすると考えられていました。したがって子どもとの間で吃音を話題にせず、吃音を意識させないことが指導の方針とされることも少なくありませんでした。しかし、近年、吃音や吃音のある自分に対して否定的な感情を抱いている子どもについては、その思いを受けとめ、子どもと指導者が共に、吃音に向き合えるようにすることが、吃音指導において重要な課題であると考えられるようになってきました。

「ことばの教室」等の指導機関では、こうした考えによる指導が実践されるようになってきましたが、具体的な手立てとなる教材も少なく、吃音の指導は難しいという思いを持っている指導者が少なくないのが現状です。そこで、私たちが所属している「ことばの臨床教育研究会」では、吃音のある子どもやその周囲の人々が、子どもたちと吃音に向き合うために役立つであろうと思われる教材を作成してきました。しかし、それらの教材の有効性については検討されてきませんでした。

この度、独立行政法人国立特別支援教育総合研究所の推薦により、公益財団法人みずほ教育福祉財団平成25年度特別支援教育研究助成を受けて、これらの教材の活用状況や有効性の調査研究をすることになりました。さらに、教材の活用が子どもたちにどのような効果を及したかを事例を通して報告することにしました。これらの結果を踏まえて、吃音指導の更なる充実を図っていきたいと考えています。

謝 辞

公益財団法人みずほ教育福祉財団から特別支援教育研究助成金を給付されたことにより、本研究が可能になりました。財団の皆様に衷心からの謝意を表したいと思います。

この助成金についての情報を提供していただき、同財団へ推薦の労を執ってくださった上に、研究を進めるに当たり、適切なお助言、ご指導を賜った小林倫代先生(独立行政法人国立特別支援教育研究所)に深く感謝申し上げます。

また、日々の教育活動で多忙を極めているにもかかわらず、アンケート調査にご協力くださったことばの教室等の先生方や関係者の皆様に心からお礼申し上げます。

さらに、吃音指導の教材を開発してきた「ことばの臨床教育研究会」の仲間にも感謝したいと思います。

概 要

私たちは、吃音のある子どもの指導について、「どもることは嫌だ」という子どもたちの思いを受けとめ、子どもたちが指導者とともに、吃音に向き合えるようにすることが大切であると考えている。その考えに基づき、教師と子どもが吃音に向き合い、吃音を肯定的に受け入れるための手立てとなる教材として、①吃音の話をするきっかけ作りをするための絵本『どもってもいいんだよ』、②子どもに分かる吃音についての知識絵本『どもるってどんなこと』、③中学進学に向けて、中学校生活を紹介したり、対策を考えたりするための絵本『中学生になるきみへ』、④吃音や自分の思いを気軽に話すことができるようにするための教材として『すごく！すごろく』等を開発してきた。

この研究では、これらの教材を活用した担当者へのアンケート調査を実施し、開発した教材の活用状況や有効性を検証し、吃音指導の在り方と今後取り組むべき課題を検討した。

その結果、各教材の作成の意図や目的は概ね達成されていることが確認された。また、今後の課題として、吃音指導の在り方や各教材の使い方の更なる検討、そして新たな教材開発の必要性が示唆された。

なお、アンケートでは「幼児編」⁽³³⁾「学童編」⁽³⁴⁾のリーフレットに関する調査もなされたが、今回の報告では割愛した。

キーワード 吃音指導 ことばの教室 教材開発 吃音に向き合う

第1章 研究の主旨

吃音指導の現状と研究の課題

ことばの教室で指導を受けている子どもの中には吃音のある子どもが少なくない。

その指導については、これまで、吃音を意識させることで、その症状が固定化したり、あるいは、悪化したりするという考え方があり、子どもに対して吃音を話題にしないことが指導の方針とされてきた。

それに対して、近年、吃音や吃音のある自分に否定的な感情を抱いている子どもについては、その思いを受けとめ、子どもと指導者が共に、吃音に向かい合えるようにすることが重要であると考えられるようになってきた。ことばの教室等の指導機関では、こうした考えの下、指導の実践が行われるようになってきたが、具体的な手立てとなる教材も少なく、吃音の指導は難しいとの印象を持つ指導者が少なくないと思われた。

このような現状に対して、私たちが所属していることばの臨床教育研究会では、これまでに吃音指導において役立つであろうと考えられる、次の4種の教材と2つの啓発リーフレットを作成した。

なお、教材の作成目的及び内容は、資料1に掲載した。

表1 作成した教材等の一覧（頒布数は平成25年4月現在の概数）

No.	教材の名称	概要	刊行年度	頒布数
1	絵本 『どもってもいいんだよ』	吃音の話をするきっかけ作りをするための絵本	平成15年	3250冊
2	絵本 『どもるってどんなこと』	吃音について子どもにも分かる知識絵本	平成17年	2750冊
3	絵本 『中学生になるきみへ』	中学進学に向けて、中学校生活を紹介したり対策を考えたりする絵本	平成22年	1300冊
4	『すごく！すごろく』	吃音や自分の思いを気軽に話すことができるようにするための教材	平成24年	350セット
5	リーフレット 吃音相談シリーズ・幼児編 『うちの子は どもっているの？』	吃音が始めた時期の保護者の対応等、子どもたちを取り巻く環境を調整するための理解啓発教材	平成19年	22000部
6	リーフレット 吃音相談シリーズ・学童編 『どもる子どもが クラスにいたら』	小学校の在籍学級担任向けの理解啓発教材	平成20年	19000部

頒布されたこれらの教材は、ことばの教室等において広く活用されていると思われるが、その活用状況や課題等は十分には把握されていない。

そこで、これらの教材を活用していると思われる吃音の指導者へアンケート調査を実施し、教材活用の状況、教材活用の有効性、課題等を把握する。さらに、教材の活用事例を提示し、今後の教材開発の在り方や、吃音指導の在り方等について検討することとした。

なお、本研究では、上記の教材のうち指導に直接活用することを目的に刊行した4種の教材を対象とした。

第2章 研究の方法

1 アンケート調査

1) 調査の名称

吃音教材にかかわるアンケート

2) 調査の目的

吃音のある児童の指導に関して開発した教材の活用状況、有効性等を把握し、吃音指導の在り方を考察するとともに、今後の取り組むべき課題を明らかにする。

3) 調査対象・調査方法

過去2年間に当該教材を購入した調査対象の機関に所属して、教材を使用したことのある対象者全てに回答を求めた。

4) 調査項目

(1) 基本項目

- ① 回答者の所属・氏名
- ② 回答者の言語指導の経験年数
- ③ 現在担当している吃音のある子どもの人数
- ④ これまでに担当した吃音のある子どもの人数
- ⑤ 吃音指導についての印象とその理由
- ⑥ 今後必要とする教材、開発を期待する教材

(2) 教材の活用状況と効果

- ① 教材の使用の仕方
- ② 教材を使った時の子どもの様子
- ③ 教材の使用効果
- ④ 教材を使った感想

5) 調査期間

平成25年6月30日に質問紙を発送し、7月20日を締め切りとした。

2 教材の活用事例

吃音のある子どもへの6つの活用事例を通して、教材の使用法とその効果について検討を加える。

第3章 アンケート調査の結果と考察

アンケート用紙の送付総数 151 機関、回収数 99 機関（回収率 66%）

アンケート回答者総数 236 名

1 回答者のプロフィール

1) 回答者の所属

ことばの教室担当者 226 名 きこえの教室担当者 2 名 それ以外 1 名 未記入 7 名

2) 回答者の言語指導の経験年数

回答者の言語指導の経験年数は、図 1 に示すように 7 年以下の人が回答者の 6 割を占めていた。

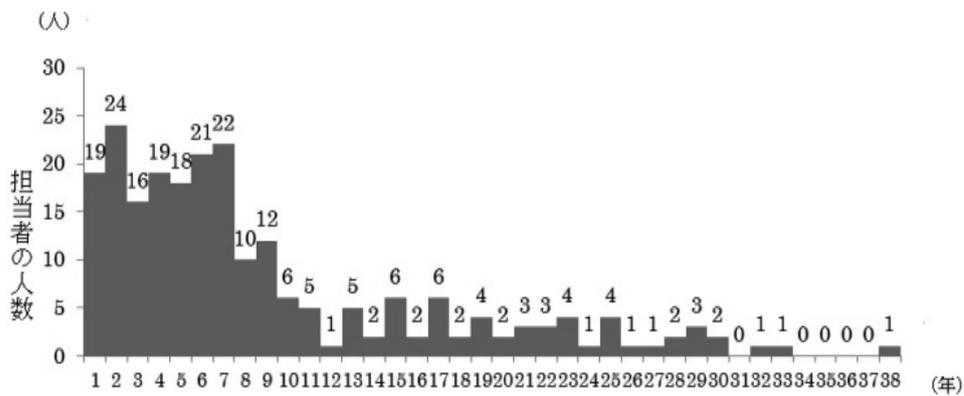


図 1 担当者の経験年数

3) 現在および過去に担当した子どもの数

現在担当している吃音のある子どもの人数は、平均 2.9 名で、2 名と回答した者が最も多く 65 名で全体の約 4 分の 1 を占めていた（図 2）。また、これまでに担当した吃音のある子どもの数は、1～5 名と回答した者が最も多かった（図 3）。

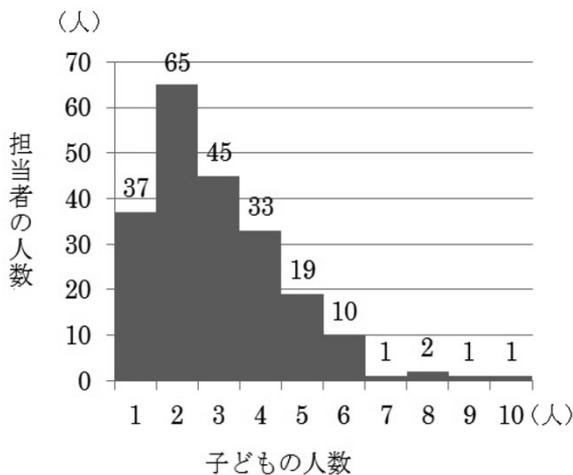


図 2 現在担当している吃音のある子どもの数

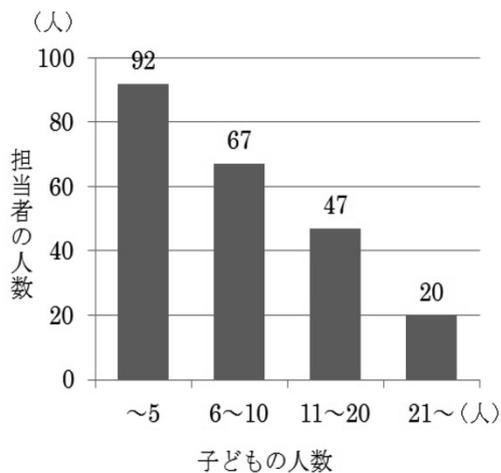


図 3 過去に担当した吃音のある子どもの数

4) 吃音指導についての印象とその理由

吃音指導がとても難しいとする回答は105名で全体の46%、やや難しいとする回答は91名で全体の40%で、「とても難しい」、「やや難しい」を合わせて「難しい」との回答は全体の86%となっている。「どちらとも言えない」とする回答は30名で全体の13%であった(図4)。

これらの結果をみると、吃音指導を難しいと感じている指導者が非常に多いことが分かる。

その理由の自由記述をみると、「とても難しい」については、指導方法や指導の見通しを持ちにくいこと、子どもの気持ち等の心理面での対応が難しいこと、保護者等の環境への働きかけが難しいことが挙げられている。また、「やや難しい」については、上記の3理由に加えて、吃音の受容と吃音の説明の難しさが挙げられていた。「どちらとも言えない」とする回答の理由では、難しさは子ども一人一人異なるという記述があった。

ことばの教室での指導の経験年数が1～7年、これまでに担当した吃音のある子どもの人数は5名程度で、現在2名程度を担当し、吃音指導に難しさを感じているというのが回答者の代表的なイメージである。

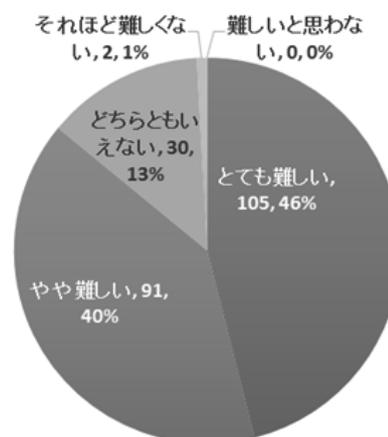


図4 吃音指導についての印象

2 アンケート調査の結果と考察

本研究で実施したアンケートの構成は、用紙に記載されている選択肢から選ぶ設問と自由記述を求める設問が混在している(資料2)。結果をまとめるに当たって、数値的に集計できる項目については、4種の教材に関する回答結果を一括報告し、自由記述で回答を求めたものに関しては、教材ごとに報告する。

1) 選択肢による回答結果

(1)教材の使用の仕方

表2 教材の使用の仕方

教材名	使用法	個別指導	グループ指導	保護者への説明	保護者・本人に渡す	在籍担任への説明	在籍担任に渡す	回答総数	教材の所有者数
どもってもいいんだよ	人数	183	31	91	22	21	4	352	211
	%	52.0	8.8	25.9	6.3	6.0	1.1	100	
どもるってどんなこと	人数	155	34	89	27	33	5	343	188
	%	45.2	9.9	25.9	7.9	9.6	1.5	100	
中学生になるきみへ	人数	83	10	39	27	11	5	175	156
	%	47.4	5.7	22.3	15.4	6.3	2.9	100	
すごく! すごろく	人数	68	42	12	1	3	0	126	110
	%	54.0	33.3	9.5	0.8	2.4	0.0	100	

4種の教材の使用の仕方について、集計結果を表2に示した。この設問では、あらかじめ選択肢を設定し、複数回答可として回答を求めているので、回答総数は教材の所有者数とは一致していない。

結果を見ると、いずれの教材においても、最高値は個別指導での使用(45.2%~54.0%)、次いで、絵本教材では保護者への説明(22.3%~25.9%)、『すごく! すごろく』ではグループ指導(33.3%)となっている。個別指導とグループ指導の使用率を合計すると、絵本の教材では、それぞれ60.8%、55.1%、53.1%となっている。また、保護者への説明と担任への説明をあわせてみると、絵本の教材それぞれ31.9%、35.5%、28.6%となっており、子どもの指導だけでなく、保護者や担任へ説明するときの便利な情報源になっていることが示唆されている。また、絵本の教材は保護者や子ども本人に相当数渡されている。おそらく、家庭においても親子で吃音の話をするときの媒体になっているのであろう。

『すごく! すごろく』は個別指導とグループ指導の両方で87.3%となっている。この教材は、すごろくという遊びを通して、指導場面で最も多く使用されていることが分かる。

(2) 教材使用後の効果

表3 教材使用後の効果

設問		1 子どもと吃音の話がし易くなったか				2 吃音の話ができた子はいたか				3 自分から吃音の話をした子はいたか				4 吃音への考えが変わった子はいたか			
		回答総数	YES	NO	どちらとも 言えない	回答総数	YES	NO	どちらとも 言えない	回答総数	YES	NO	どちらとも 言えない	回答総数	YES	NO	どちらとも 言えない
どもってもいいんだよ	人数	180	176	2	2	178	174	4	0	168	110	53	5	134	64	43	27
	%	100	97.8	1.1	1.1	100	97.8	2.2	0.0	100	65.5	31.5	3.0	100	47.8	32.1	20.1
どもるってどんなこと	人数	151	149	1	1	153	150	3	0	148	107	38	3	118	70	25	23
	%	100	98.7	0.7	0.7	100	98.0	2.0	0.0	100	72.3	25.7	2.0	100	59.3	21.2	19.5
中学生になるきみへ	人数	80	77	3	0	76	70	6	0	65	42	21	2	50	21	19	10
	%	100	96.3	3.8	0.0	100	92.1	7.9	0.0	100	64.6	32.3	3.1	100	42.0	38.0	20.0
すごく! すごろく	人数	72	67	4	1	70	65	4	1	64	39	22	3	45	18	17	10
	%	100	93.1	5.6	1.4	100	92.9	5.7	1.4	100	60.9	34.4	4.7	100	40.0	37.8	22.2

4種の教材の使用後の効果は、指導者自身に対する1項目と子どもに対する3項目について、「YES・NO・どちらともいえない」の3選択肢を用いて回答を求めた。その結果を表3に示した。

表を見ると、指導者のほとんどは、4種の教材のいずれにおいても吃音の話がし易くなったと回答している(設問1)。指導者自身、子どもと吃音の話ができないということが、以前に比較すると少なくなった結果と思われる。子どもについては、4種の教材のいずれにおいても、吃音の話ができた子どもの割合は、90%を超えている(設問2)。これは、おそらく指導者が自然に子どもに対して吃音の話をするという、相互コミュニケーションの良さに由来するのだろう。

子どもが自分から吃音の話をしたかという設問3については、YESの割合は、それぞれ、66%、72%、65%、61%と設問1に比べ減少している。子どもの吃音への考え方の変化(設問4)は、さらに減少し、それぞれ48%、59%、42%、40%となっている。子どもが本音で、「どもってもいいんだよ」と思えるようになったとすれば、自分から吃音の話をするであろうし、それは考え方の変化が起きたからということになる。吃音指導の究極の目標は、子どもたちが本気で「どもってもいいんだよ」と思えるようになることであり、それを支援する周囲の大人たちの関わり方が重要になってくるだろう。

(3) 教材を使った感想

表4 教材を使った感想

教材 \ 感想		回答者数	とても良い	良い	あまり良くない	悪い
どもってもいいんだよ	人数	173	99	73	1	0
	%	100	57.2	42.2	0.6	0.0
どもるってどんなこと	人数	153	103	49	1	0
	%	100	67.3	32.0	0.7	0.0
中学生になるきみへ	人数	82	59	23	0	0
	%	100	72.0	28.0	0.0	0.0
すごく！すごろく	人数	78	54	24	0	0
	%	100	69.2	30.8	0.0	0.0

教材を使った感想のうち、選択肢による回答結果を表4に示す。選択肢は「とても良い」、「良い」、「あまり良くない」、「悪い」の四選択肢であり、そのうちのひとつを選ぶ。結果を見ると、4種の教材ともに、使用者の感想は「とても良い」と「良い」に集中しており、両者あわせると、いずれの教材も99%または100%となる。

ここで、「回答なし」に注目したい。教材所有者のうち、『どもってもいいんだよ』では38名、『どもるってどんなこと』では35名、『中学生になるきみへ』では74名、『すごく！すごろく』では32名の無回答者が存在している。無回答の理由を確定することは困難であるが、使った方が良さそうな子どもに出会わなかった、あるいは使う時機ではないだけなのか、使ってみたが子どもから反応を得ることができずあきらめてしまったのか、所有したものの使う気持ちが起きないのか等、いろいろな想像が可能である。よりよい教材を開発しようと思えば、良かったという感想以上に無回答者からの回答を引き出す必要があるかも知れない。なお、自由記述の部分については後述する。

2) 自由記述による回答結果

自由記述を求めた質問項目に関しては、記載された文章の内容を読み取り、整理・分類した。一人の回答者が複数の文を記載し、その内容が異なる場合は、回答数は複数としてカウントした。

(1) 『どもってもいいんだよ』

① 教材を使った時の子どもの様子

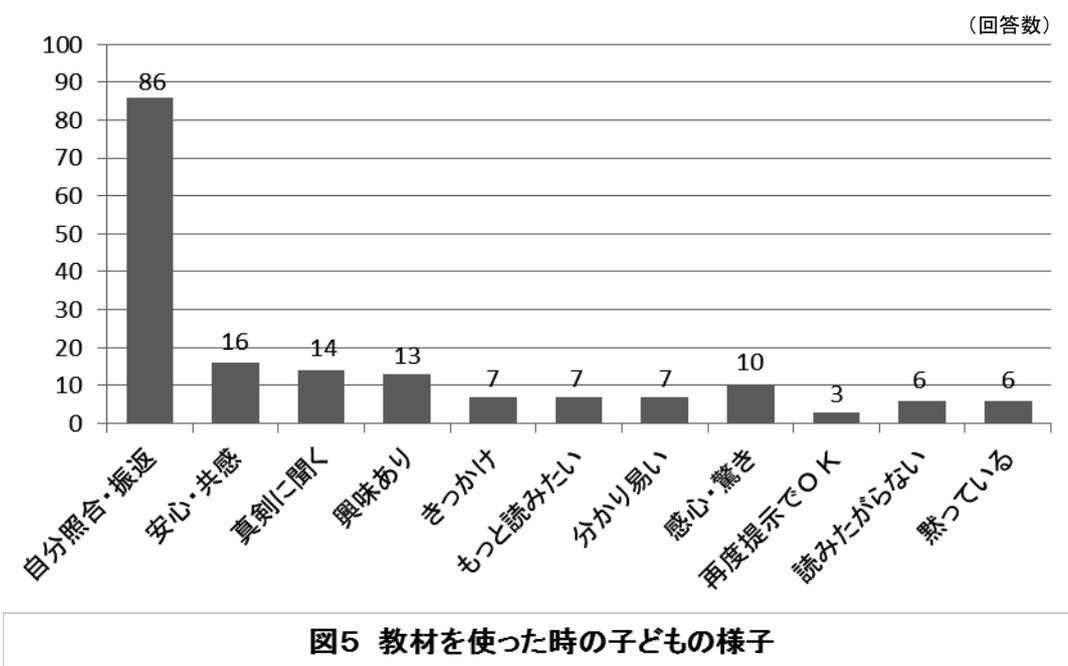


図5 教材を使った時の子どもの様子

回答者数は122名、回答数は175件となっている。

子どもの発言として、「保育園の時からどもっていたよと発言した」という文が記載されているときには、[自分照合・振り返り] 1件とし、更に「自分も〇〇ちゃんと同じだと反応し安心したようだった」という文が記載されていたときには、[安心・共感] 1件とした。図5は、絵本教材『どもってもいいんだよ』を使用した時の子どもの様子欄に記載された自由記述を、整理・区分してまとめたものである。回答の約9割が、「ぼくもこうなることがあるんだ」「自分だけじゃなかったんだ」「これは自分と同じだけど、これは違うな」と自分を振り返ったり、自分と比べたりする反応であり、その後、吃音のことを話すようになったという絵本を作成するときに望んでいた反応であった。

「黙っている」「読みたがらなかった」といった記述も若干あった。子どものこの種の反応は当然あり得るものとして絵本に添付されている「使い方の手引き」に記載があり、このような場合の対応として、子どものいろいろな反応をまず受け止めることを勧めている。回答の中に、「少し時間をおいて再度提示すると、自分の思いを語り始めた」という記述もみられた。このことは、教材『どもってもいいんだよ』が、適切に使用されていることを示唆していると考えられる。

② 教材を使った感想

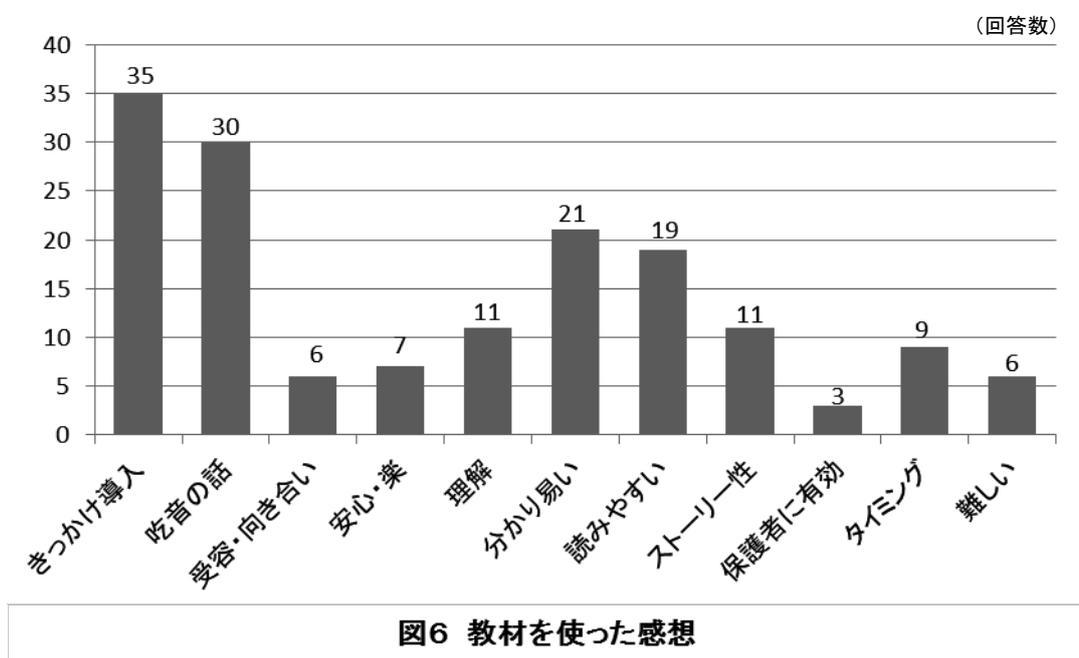


図6 教材を使った感想

回答者数は105名、回答数は154件となっている。

『どもってもいいんだよ』を使った指導者の感想に関する自由記述である。前述の子どもの様子と同じ手続きをとり、自由記述を整理しまとめたところ、図6のようになった。子どもの反応、使用効果、子どもの変容を踏まえた上での感想である。使用後の感想として選択肢に対して回答を求めた結果では、表4に示されているように、「とても良い」「良い」の両方で100%に近い数値を示している。その理由と使用するに当たって使用者が体験した留意点等が、この感想にあらわれていると思われる。

教材作成に当たり、実際に指導に当たっている教師等の体験をヒントにしたエピソードを挿入したことも、教師や子どもの共感を得ることに役立ち、この結果になったものと思われる。

③考察

吃音の指導場面で、子どもに吃音について尋ねても「別に～」「大丈夫～」等の返事で済まされ、子どもの内面にある本当の気持ちをことばで聞くことができないという場面を多くの吃音の指導者は体験している。『どもってもいいんだよ』は指導者と子どもが吃音に向き合うためのきっかけになることを目的として作成されたものである。選択肢による回答および自由記述の回答を見ると、その目的は十分に果たされていると考えてよいだろう。

『どもってもいいんだよ』に対する自由記述の一部は資料3として掲載した。

(2) 『どもるってどんなこと』

①教材を使った時の子どもの様子

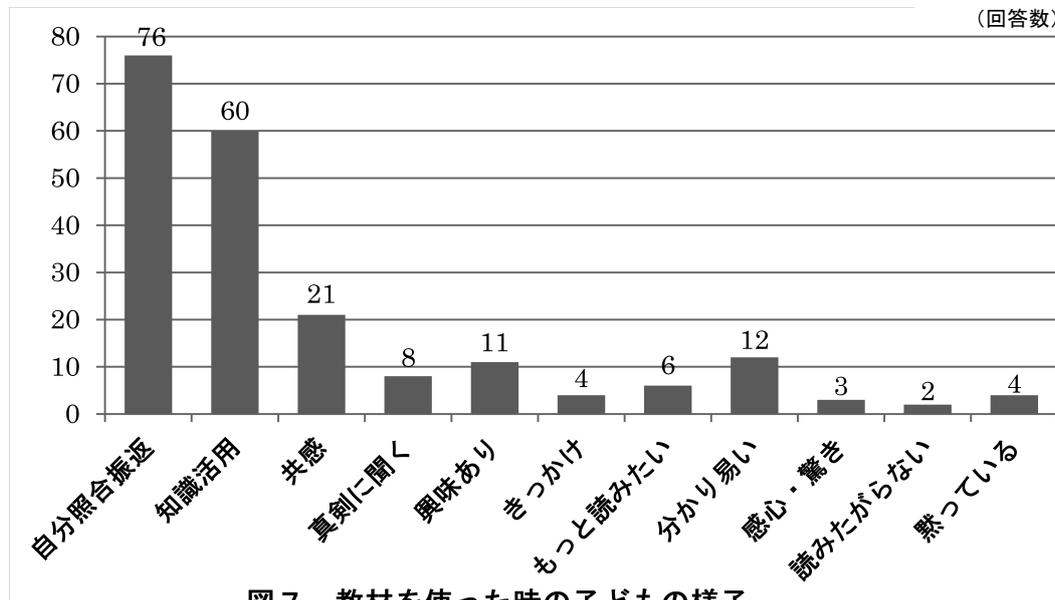


図7 教材を使った時の子どもの様子

回答者数は120名、回答数は207件となっている。

この項目においても、自由記述として記載されている文の意味内容を整理分類し、図7にまとめた。一人の回答者が複数の文による回答をしている場合、件数は複数としてカウントした。子どもの様子は、複雑な場合が多いが、吃音のタイプについて「自分はこのタイプだ」、「ボクは緊張すると増えるんだ」、「私も、のどに蓋って感じ」等の反応は、[自分照合・振返]に分類し、「波があることが分かった」、「自分だけとっていた吃音の人が、100人に1人もいるんだ」、「どもっていても、どんな仕事でもできるんだね」、「治りにくいことをはじめて知った」等は、[知識活用]に分類した。「吃音が治りにくいと知って驚く子ども」や「世界中に吃音のある人がいることに驚き、家族にその話をした」、「研究する人がいることに驚く」等、子どもの様々な様子が記述されている。

②教材を使った感想

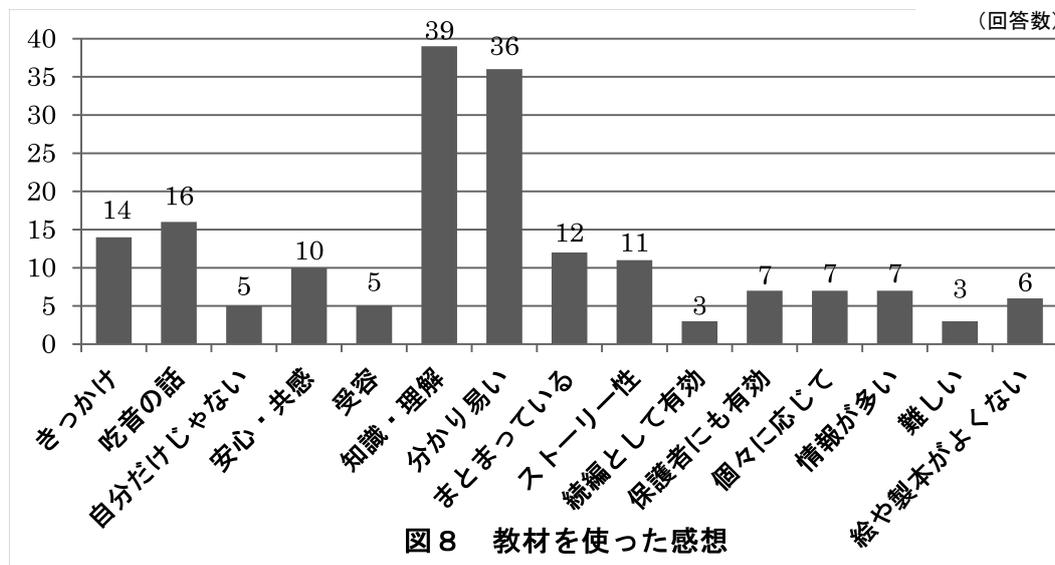


図8 教材を使った感想

回答者数は93名、回答数は177件となっている。

この項目においても、自由記述として記載されている文の意味内容を整理分類し、図8のようにまとめた。一人の回答者が複数の文による回答をしている場合、件数は複数としてカウントした。分かり易くまとまっていて、ストーリー性もあり、使い易い教材であること、吃音の知識・理解に役立つこと、『どもってもいいんだよ』の学習後に使うと効果的であることや、子どもが指導者と親しくなって、吃音を話題にできると感じた頃を見計らって読んでいる等の記述があり、ある程度吃音について話せるようになった段階で使われているようだった。

将来の見通しや、職業についての話にもふれられていて、子どもにも分かり易く吃音についての知識を増やせたようだ。吃音について正しい知識を学ぶきっかけになった等の感想とともに、「治るということについての考え方」「どもる自分を受け入れる」「自分の吃音を語れる」ことの難しさも感じたとの回答もあった。また、「漫画になっているので、読み易く分かり易かった」「低学年の児童に分かり易かった」等、子どもの様子と関連した記述が多く見られた。

③考察

選択肢による感想では、「とても良い」と「良い」をあわせると99%となっている。この自由記述の回答はその内容と考えると良いだろう。絵本『どもるってどんなこと』は、子どもに分かるような、吃音についての知識絵本として作成したものである。選択肢による調査結果(表3)でも、活用の結果としてよい効果があったとの回答がなされていた。記述回答にも、「吃音の知識・理解に役立った」、「子どもにとって親しみ易く使い易い」との意見や感想が多く、教材作成の目的に即して使用されていることが示唆され、それが効果的な結果につながっているものと考えられる。

『どもるってどんなこと』に対する自由記述の一部は資料3として掲載した。

(3) 『中学生になるきみへ』

①教材を使った時の子どもの様子

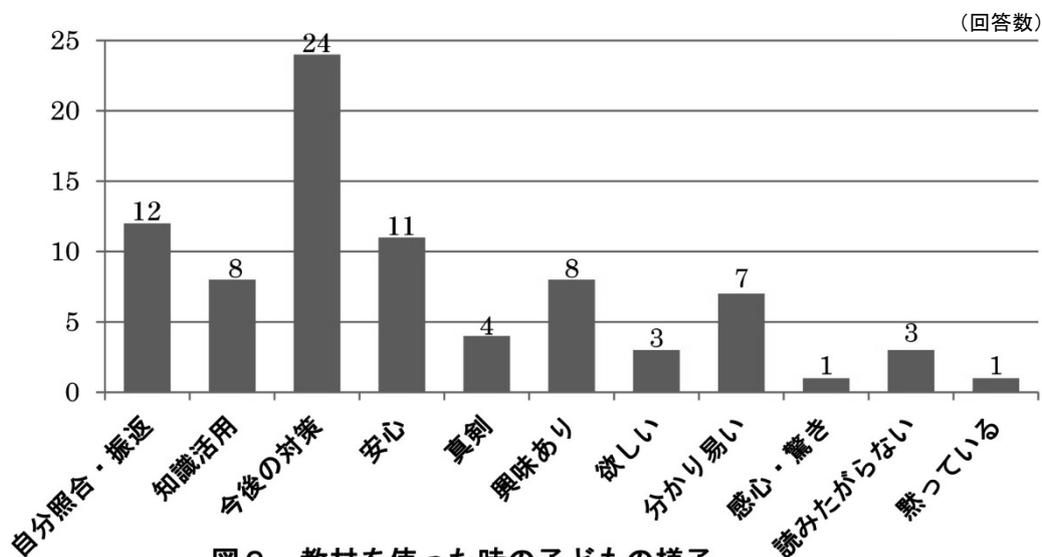


図9 教材を使った時の子どもの様子

回答者数は57名、回答数は82件となっている。

子どもの肯定的な反応の記述が全体の8割以上あった(図9)。

その中で、「中学校で起こりうる様々な場面が書かれているので、子どもと読みながらどうするか考えていくのによかった」「第一章で中学校に行ってからの様子を知り、本人なりに対応法を考えて話す時間が作れた」「友達への対応、先生にどうやって伝えるか・・・等、それぞれの項目に対して、自分だったらと、真剣に考え、意見を言っていた」「中学がどういうところなのか、例を読みながらイメージできたことで、安心したとの感想が聞かれた」、中学校での対策を話し合えたこと等の記述が4割以上あった(図9)。一緒に対応策を考えられたことや中学校へ行ったら自分はこうしようと話すことができた等中学校への進学に向けての心構えや対応策等を話し合えたとの記述が多かった。

②教材を使った感想

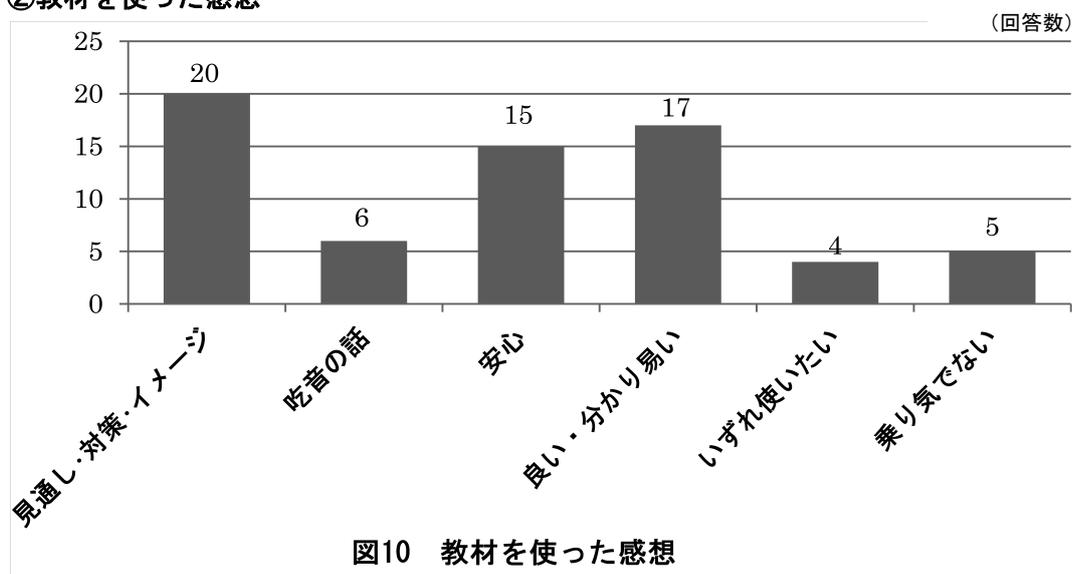


図10 教材を使った感想

回答者数は53名、回答数は67件となっている。

肯定的な意見が8割以上であった(図10)。そのうち6割が、「具体的なイメージが持てて、話し合いもし易くてよかった」「中学生になるに当たって、保護者も本人も不安に思う方は多いので、中学校がどんなところか、知るためにもよかった。とても有意義だと思う」等、中学校へ行ってからの見通しやイメージがつかめたとの意見であった。

また、「具体的な場面でイメージでき、絵もあるので、子どもたちにイメージし易い」「子どもたちが読んで分かり易い」「6年生の子どもには共感できるエピソードが多く盛り込まれていて、とても興味深く読んでいる」等絵本として作られた教材であることや話題の取り上げ方等、使い易さについての感想があった。

加えて、活用する時期に言及された意見として「中学には通級がないので、小6でこの教材を使うことは、とてもよいと思う」といった意見と「子どもたちにどのタイミングで示したらよいか検討しています」等、教材を使用する際の留意事項についての記述が見られた。

③考察

この教材は、子どもが抱くと思われる中学校生活への疑問や不安に応えるための教材として作成した。中学校生活を紹介したり、子どもが経験すると思われる事柄について対策を考えたりするための教材である。

調査では、活用の結果としてよい効果があったとの肯定的な回答が多く、記述回答にも、中学校へ行ってからの見通しやイメージがつかめたこと、小学校6年生の段階でこの教材を使うことが効果的であること等の意見や感想があり、教材の作成のねらいに即して効果的に活用されたと思われる。

(4) 『すごく!すごろく』

①教材を使った時の子どもの様子

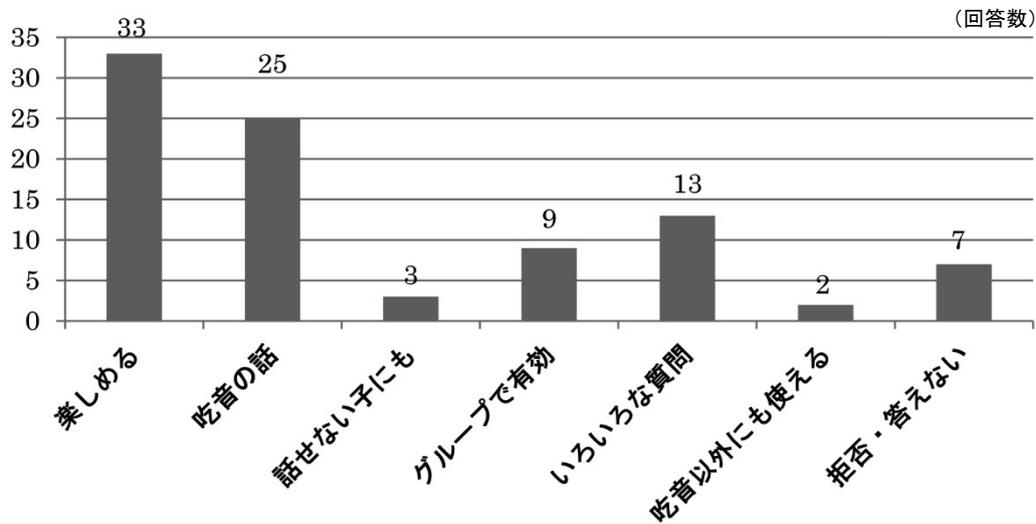


図11 教材を使った時の子どもの様子

回答者数は59名、回答数は92件となっている。

子どもの肯定的な反応の記述が全体の9割であった。そのうちの6割が「楽しめる」との記述であり、また、「吃音の話ができた」との記述も多かった(図11)。また、すごろくのカードが「吃音のこと」だけでなく子どもの生活に関わる事柄を広く取り扱っているところもよいとの記述があった。

楽しみながら自然に吃音の話ができる教材として活用されていると思われた。

②教材を使った感想

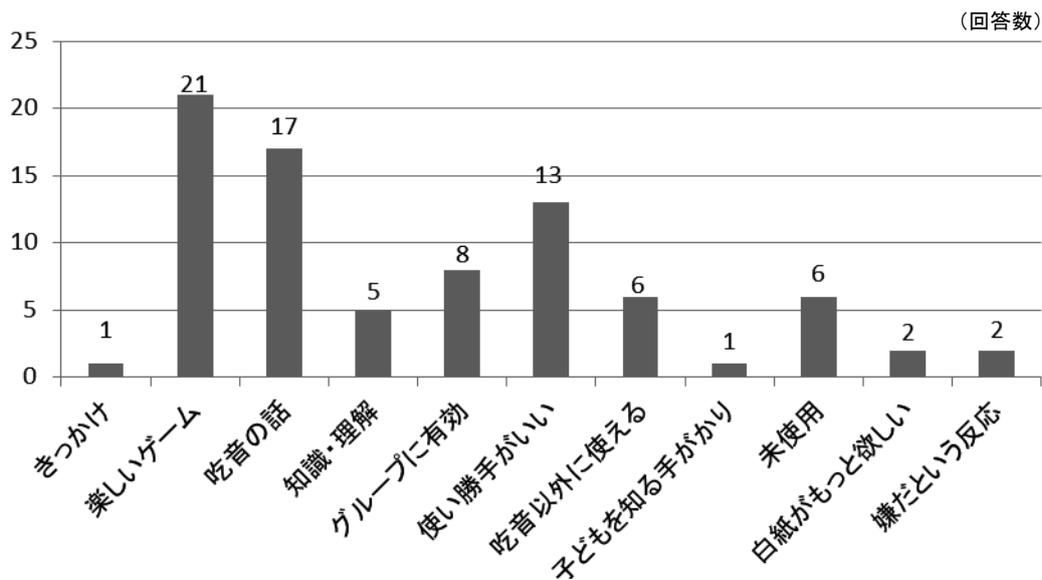


図12 教材を使った感想

回答者数は57名、回答数は82件となっている。

すごろくとして作られた教材であることや使い易さに関する記述が全体の8割であった。そのうちの9割が肯定的な意見であった（図12）。

「ゲームをしながらなので、話しやすい雰囲気の中でのやりとりができる」「ゲーム形式なので子どもにも抵抗が少なく楽しみながらとりくめる」「純粹にすごろくとしても、とても楽しめるし、カードを選んで本人がどう思うかを突っ込んで聞くことができる」等、ゲーム感覚で楽しく、自然に吃音の話ができたとの記述が多かった。

また、「吃音以外の質問も盛り込まれているので、楽しみながらすごろくができる」「吃音以外の子どもにも目的に応じてカードを選択して使用できた」「吃音ではないが話すことが苦手な子どもにも使っている」等、吃音のある子どもに限らずいろいろな子どもを対象に使えるとの意見があった。

その他、「子どもによってカードが選択できること」「個別でもグループでも、楽しく学習できる」「ゴールのないフリープランのシートは、子ども達にルールを作ってもらいながら使用できる」「メンバーにより楽しみ方がいく通りももてる」等使い勝手のよさについての意見や感想があった。

③考察

この教材は、すごろく形式で、ゲームを楽しみながら吃音のある自分を振り返ったり、将来像を描いたりして、子どもが吃音を肯定的に受け入れ、吃音に向き合うための支援をするものとして作成した。

調査では、使用後の効果について、全体の93%の指導者が子どもと吃音の話をし易くなったと回答し、また、自分から吃音の話をできた子どもがいたとの回答は全体の61%であった（表3）。

ゲーム感覚で楽しく、自然に吃音の話ができたとの感想や指示カードの使い方を工夫することで子どもの状況に合わせた使い方ができること等の感想や意見が回答され、教材の作成のねらいに即して効果的に活用されていると思われる。

その他、吃音グループでの活用、保護者への説明の資料として、すごろくのカードを見せて説明したり、親子での話し合いのきっかけとして使ったりした等と様々に工夫して活用されている状況が回答され、この教材の使い勝手のよさ等が肯定的に評価された。

(5) 今後必要とする教材や開発を期待する教材

今回のアンケートでは、基本調査の中で「今後どのような教材があるとよいとお考えでしょうか？」との質問を、自由記述で求め、94名から回答を得た。回答者が複数の項目に関する要望を記述している場合は、のべ件数として算出し、計145件とした。回答傾向は、以下の表5に示すとおりである。

表5 今後必要とする教材、開発を期待する教材

対象	種類	内容(件数・重複あり)	具体的な記述例
子ども	吃音や自身向き合うもの	吃音の理解を深めるもの	20 <ul style="list-style-type: none"> ・子どもがもっと楽な気持ちで吃音のことを教員と一緒に考えていけるようなものがあればと思っている ・児童が自分の吃音の状態を振り返ってチェックできるようなシート ・吃音クイズ集（なぞなぞのような）かわいいイラスト付きのもの ・子どものQ（質問・疑問）に答えているような教材 ・ことばの教室に通級を開始したら、1冊ワークが渡され、「今の気持ち」「初めて知ったこと」「こんな場面が苦手」等、自分の思いやその時の気持ちを書き込みながら吃音の知識を学ぶ物が欲しい ・吃音の子どもたちの生の声を載せた本
		自己理解や自己表現の促進	10 <ul style="list-style-type: none"> ・安心して過ごせる場、伸び伸びと自己表現できることの大切さについての読み物<子ども向け・親向け> ・すごろく、カルタのように楽しみながら自己表現や吃音について話題にできるもの ・自分の心に何気なく向き合うことのできる質問集 ・自己表現や自己開示を促進させるようなゲーム等の紹介
		手記や体験談	24 <ul style="list-style-type: none"> ・体験談が絵本か物語になったもの（将来像を思い描けたり、不安が除けたりでき、吃音のエピソードを交えながら、大人になるまでの半生記を描いたようなもの） ・吃音のある子、大人、等の体験談を見聞きできる絵本 ・吃音に子どもたちが吃音を受容するまでにやってみたことや効果があったと思われる方法の手記 ・ことばの教室卒業後の体験談（受験・就職）を知ることができるもの ・吃音者の方（職業について）の体験談が分かる教材 ・吃音のある方がご自分の経験や今考えていること、これから大切にしていきたいと思っていること等を綴ったメッセージ集 ・新聞社から出版されている「いじめられる君へ、いじている君へ、いじめを見ている君へ」のように自身がそうであった著名人が子ども自身に語りかける本があるといい
		視聴覚教材	11 <ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちが、グループで吃音について語り合ったり、個別で吃音について語ったりしているDVD ・ビデオ教材（例：吃音のある人に伝えたい体験談、今活動している有名人からのメッセージ 等） ・各分野で活躍している有名な方が、どもりながら小学生のときの話をしたり、子どもたちへのメッセージを語ったりしてくれるDVD ・アニメーションDVD等（子どもが見て分かりやすいもの）（症状の説明や、まわりはどのように受けとめるとよいか等）
		本研究会の教材の更なる充実	18 <ul style="list-style-type: none"> ・「中学生になるきみへ」の続編として、「就活編」（いろいろな仕事について人の談話等）や「婚活編」があるとうれしい ・「すごく！すごろく」パートⅡのようなものが出るとうれしい（実際に質問カードを子どもと作ったりして活用している） ・「どもってもいいんだよ」「中学生になるきみへ」の動画バージョン（吃音がある子のドラマのようなもの） ・「どもってもいいんだよ」「どもるってどんなこと」の紙芝居版

吃 ア音 プの ロ症 状 チ等 に 対 す る	流暢性を形成 するもの	16	<ul style="list-style-type: none"> ・吃音の様子が把握できる音読教材 ・絵カード（短い単語、長い単語、全ての音） ・お話カードのようなもの、吃音指導に適した音読集のようなもの ・軽減する指導、軟起声のようなものについての具体的な内容が書いてある教材 ・流暢性を高めるためのドリルブックのようなもの ・単音節から文まで、段階的にできるもの ・吃音の状態が緩和されるような話し方、トレーニングの教材
	発声に関する もの	12	<ul style="list-style-type: none"> ・楽しく声を出せる活動の紹介 ・軟起声をうながすための教材 ・発声法のビデオ、DVD
	緊張をほぐす もの	3	<ul style="list-style-type: none"> ・体の緊張をほぐす活動の紹介 ・体の緊張をほぐすビデオ・DVD ・ガイダンス（知識）、発声法、脱感作等知識と学習法が1冊になったような教材
	グループ指導	9	<ul style="list-style-type: none"> ・グループ活動で話がしやすくなるようなもの ・グループ学習での有効な教材
指導 の 充実	その他	8	<ul style="list-style-type: none"> ・本人が自立調整する手立てとなる本が欲しい。（言葉も気持ちも） ・親、教師、友だちがそのことを知り、接し方を変えたことによってその子の吃音の状態は全く変わらなくても周りの状況が大きく変わり、その子自身が家庭でもクラスでもとても生きやすくなったという教材 ・吃音と発達障害等、多面的な支援を必要とする子どもたちと一緒に考えられるような教材
保 護 者	保護者向けの 本 子どもともに 考えられる 本	6	<ul style="list-style-type: none"> ・吃音児をもつ保護者のエンカレッジブック ・保護者が「治したい」と強く思っていて、児童の吃音指導を強く望んだり、児童に指示が多かったりする保護者がいるので、保護者向けの読み物 ・指導の中で、吃音について児童や保護者と共に考えられるような本や遊びや映像 ・保護者向きに、「どもる」ということばをあえて使っていない絵本
教 員	指導書・指導事 例集	10	<ul style="list-style-type: none"> ・吃音児への具体的な指導事例集 ・グループ活動の実践例 ・理解授業の実践例 ・吃音指導に使えるあそび集（リズムに合わせて）、プリント集等、即実践できそうなものがあると、経験の浅い者にとっては助かる

期待する教材の種類としては、「吃音や自分自身に向き合うもの」が 83 件（57%）、「吃音の症状等に対するアプローチ」が 31 件（21%）あった。

3) 調査結果の総合的考察

これまでに、①吃音の話をするきっかけ作りをするための絵本『どもってもいいんだよ』、②子どもに分かる吃音についての知識絵本『どもるってどんなこと』、③中学進学に向けて、中学校生活を紹介したり、対策を考えたりするための絵本『中学生になるきみへ』、④吃音や自分の思いを気軽に話することができるようにするための教材『すごく！すごろく』の4種の教材について調査結果を整理した。

ここでは、調査の結果の内、使用後の効果と使用後の感想（評価）について、4種の教材について比較し、それぞれの教材の特徴と使い方について整理し考察する。

(1) 使用後の効果

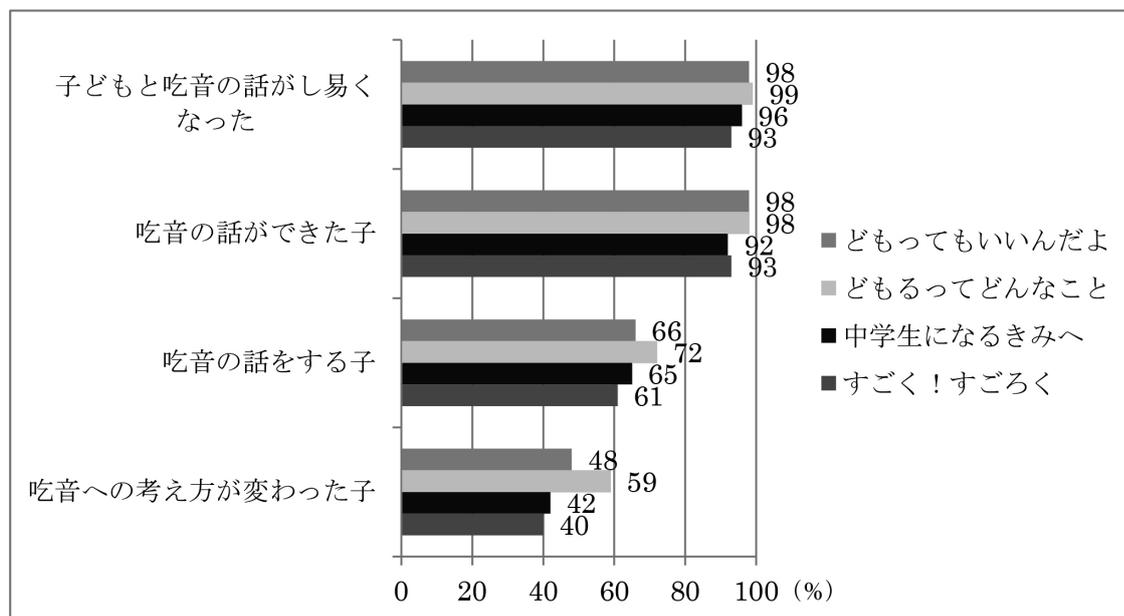


図 13 教材の使用後の効果

図 13 に示す通り、すべての教材で「担当者自身が子どもと吃音の話がし易くなったか」の問いに9割以上が「はい」と回答した。すべての教材で「吃音の話ができた子がいたか」の問いに9割以上が「はい」と回答した。「その後、自分から吃音の話をするようになった子はいたか」の問いに「いた」との回答は、どの教材においても6割から7割程度だった。「その後、吃音に対する考え方が変わった子はいたか」の問いに「いた」との回答は、4割から6割程度であったが、すぐに肯定的な受容を進めている子ども中にはおり、指導者としては大きく変化したとらえていない場合も推察される。

(2) 使用後の評価（感想）

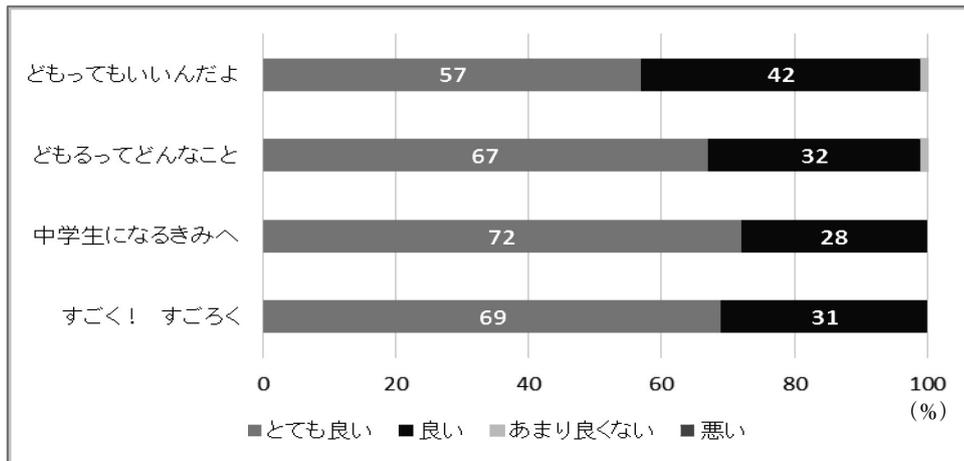


図 14 教材の使用後の感想

図 14 に示す通り、すべての教材が、「とても良い」と「良い」の評価を合わせて、ほぼ 100%の肯定的な評価であった。「悪い」の回答はなかった。

4 種の教材はそれぞれ、刊行された時期、頒布状況が異なるため、その活用の進捗には違いがあると思われるが、どの教材についても、担当者自身が子どもと吃音の話がし易くなったこと、子どもが吃音の話をするようになったことにおいて、一定の効果があったことが確かめられた。

一方、「その後、吃音についての考え方が変わった」の回答については 4 割から 6 割程度で（図 13）、教材を活用したことの成果として報告されている。このことから、吃音を肯定的に受け入れるための今後の教材の活用法について、また、吃音の指導過程に関して、更なる検討・研究が必要であろう。

(3) 教材の活用についての課題

教材を使っても、吃音についての話をすることができない子もいたという回答があった。こうした場合には、まずは「今は話したくない」という子どもの気持ちを受け止める必要があるだろう。また、例えば、「吃音が治る・治らない」ということに関して、低学年には理解が難しい内容があるかもしれないが、その場合には、教材の一部を使う等使用の時期と使用の方法を考える必要がある等、どの教材をどのような時期にどのように使うかといったことも重要であると思われる。こうした観点での意見として、「子どもたちにどのタイミングで示したらよいか検討している。」といった回答もあり、今後の活用の在り方を検討する上での示唆となった。

いずれにしても、個々の子どもの学年段階、吃音への意識の状況、本人のニーズ、発達段階等に合わせて使うことが重要であると思われる。

第4章 教材の活用事例（学年順に提示）

事例(1) 吃音に対してオープンになった子ども

小学校2年生 男子 使用教材『どもってもいいんだよ』

発音と吃音が主訴で、2年生から通級を開始した。繰り返し、引き伸ばし、つまりの症状が見られる。保護者が吃音に気づいたのは、幼稚園の年長の時で、話したいことがたくさんあり、勢い込んで話していた時だった。その後、父親がはっきり話すよう注意したことから本人が意識し、緊張して話すようになった。1ヶ月くらい吃音がひどい時期があり、注意をしないようにしたら少し落ち着いた。その後、多くの人がいる場で、兄弟と一緒に進行役をする場面があり、その場で言葉が出なくなった。吃音の症状が重くなり、話すたびに吃音が出るようになったという。言いたいことが言えないので、声が大きくなったり、体を揺する随伴症状が出たりした。繰り返し、引き伸ばし、つまりの症状があり、保護者も本児も気にしていたが、親子で吃音のことを話してはいなかった。頭の回転が速く、早くたくさんのことを伝えたいという気持ちがあることがうかがわれた。

本児の指導は、発音の指導を先に行い、本児の様子を見ながら、吃音のことを話題にしていこうと考えた。発音の練習途中で吃音が出た時に、言葉が言いにくい時があるか質問したところ、すぐに「今みたいにつかえる」と話し、吃音を話題にすることに抵抗がないことが分かった。絵本『どもってもいいんだよ』を読んだ後、ことばの教室だけでなく、家庭でもオープンに話ができるようになった。家庭で母親に、話しにくい時があると訴えた時には、母親がその気持ちを受け止め、「今度、ことばの教室で相談してみようか。」と話をした。次の通級の日に、本人から「今日は相談したいことがあるんだ。オのつく言葉でつまりやすくて、言葉がつかえちゃう。」と話があった。練習したいと言うので、「オ」のつく単語や句でスピードのコントロールをしたり、最初の部分だけ柔らかい発声で言う練習をしたりした。また、リズムや速さをいろいろ変えて音読することにも取り組んだ。

絵本をきっかけに、吃音のことを話題にできるようになったこと、家族が『吃音のある子どもに向き合うために』⁽²⁵⁾を読み、吃音の学習をしたこと、在籍学級担任が環境調整をしてくれたこと等により、吃音に対するマイナス意識が強くなる前に解消された。友達に話し方を聞かれた時、「ほら、ぼく、ことばの教室に行ってるでしょう？だからなんだよ。」と答えることができた。その後は、最初に話した子が他の子に伝えてくれたという。1年間で発音の改善と同時に吃音の症状も軽くなり、通級終了となった。

事例(2) 絵本の中の人物に興味を示した子ども

小学校3年生 男子 使用教材『どもってもいいんだよ』

1年生より通級。繰り返し、引き伸ばし、つまりの症状が見られる。ことばの教室では、学校生活での困り事等について一緒に考えてきた。年上の吃音のある児童とのグループ学習もとても楽しみにしていた。

本児は学校で話をしている時に、待ってもらうのは悪いと感じていた。そこで、本児と同じように感じていた児童が、クラスで吃音のことを発表した時のことを紹介した。発表の中でその児童が友達に「話し終えるまで待って欲しい」と話したことについて、「同じだ」と自分から話した。発表した児童が『どもってもいいんだよ』の絵本を使って吃音の話をしたと説明すると、本児は「読んでみたい」と興味を示し、一気に黙読した。絵本に出てくる登場人物について「気持ちが分かる」と話した。また、本を誰が作ったかということにも興味を示し、担当者に尋ねた。本の作成にはことばの教室の担当者や吃音について研究している人等がかかわり、実際に絵本のような体験をしたモデルがいると説明すると、さらに親しみが増した様子であった。

事例(3) 友達に吃音の知識を教えることができるようになった子ども

小学校5年生 男子 使用教材『どもるってどんなこと』『すごく!すごろく』

吃音を主訴に3年生から通級した。個別指導に加え、4年生では月に1回のグループ指導も行った。繰り返し、引き伸ばし、つまりの症状が見られる。

3年生の時に、転校してきた友達から話し方について厳しい言葉で指摘されたことから、吃音をマイナスのものとして意識するようになり、学校から帰ってきて泣く日もあった。本児は、この頃が最も吃音の症状がひどかったと認識していた。本児が自分の吃音を受け止めていく過程で、自分の言葉の状態が得体の知れないものではなく吃音と分かったこと、その「吃音」を『どもるってどんなこと』で知識として理解したことが大きかった。クラスの中で友達との良好な人間関係を作った本児は、話し方について聞かれたときに、吃音について説明し、教えてあげることで、それ以上は相手が質問してこないことに気付いた。

4年生の6月には、本児の中では吃音の頻度が高かったが、「今が一番言い易い。」という認識を持っていた。3年生の時に「一番ひどかった(症状も精神的にも)」という思いや、「これが自分の話し方」と思うようになったことが影響しているようだった。本児が教科書の音読をしているテープを聞かせると、「読んでいる時はそれほどどもっていないと思っているけど、録音を聞くと、自分が思っているよりどもっている。」「1回どもったと思っているところは、2～3回どもっている。」と話した。

いろいろな話し方を体験した時には、戦場カメラマンの渡部陽一氏のとてもゆっくりした話し方を真似して、「どもらないけど話しにくい。自分じゃないみたい。」と言う。その後、軽くどもる話し方の学習は、しなくても大丈夫だと言い始めた。友人から「どうしてそうなるの?」と聞かれたら、吃音の知識を教えることで切り抜けられると話した。

一方、4年生の途中から、「最近、よくつかかかってない?」と、自分から吃音を話題にして保護者に話しかけ、吃音の話親子でするようになった。それに対して、保護者も感じていることを話すことができた。4年生の後半、個別指導の中で『すごく!すごろく』で遊んだ。本児は「自分の気持ちを話すカード、吃音の知識を答えるカード(赤)」「いろいろな話し方のカード、身体を使った表現のカード(緑)」が好きで、それらの色に止まりたがった。それらの質問に答える中で、本児の思いを聞くことができ、また、本児も自分を表現することを楽しんでいた。「どもったとき、あごに力が入っているような気がするなあ。」「どもりそうになったとき、言葉を言い換えることが昔はあった。1のことをONEって言ったりしてた。」「困った時にまず相談する人は、〇〇(友達のあだ名)。」等、担当者にとって初めて知ったことも多くあった。本児がグループ学習のリーダーになった時、『すごく!すごろく』を紹介し、担当者も含めてメンバー5人で取り組んだ。本児が吃音についてこだわらずに話すのを見て、吃音について深くは触れたがらなかった児童も、パスしないで語る場面が見られた。本児は、「(どうしてそういう話し方になるのか聞かれたら)これは吃音って言うんだよという話から始めて、吃音について教えてあげる。」と答えた。同学年の男子は、「分からないって言う。」と答えていた。吃音があるということでは共通していても、吃音に対する態度が違っていることを互いに理解する手がかりにもなった。

5年生になり、通級回数を隔週にして様子を見たが、吃音の症状も軽減し、気持ちの面でも変化がなかったことから、11月で通級終了となった。

事例(4) クラスで吃音のことを説明した子ども

小学校6年生 男子

使用教材『どもってもいいんだよ』『どもるってどんなこと』『中学生になるきみへ』

1年生より通級。繰り返し、引き伸ばし、つまりの症状が見られる。通級が始まってから、吃音のことは日常的に話し合い、絵本『どもってもいいんだよ』も一緒に読んでいた。本児が担任や友達と吃音のことを話す必要があった時には、絵本に登場する人物の言動を参考にして一緒に考えることもあった。

3年生の時に、本児が「クラスでことばのことを説明（発表）したい」と話したので、そのための準備を始めた。吃音症状の説明については、絵本『どもるってどんなこと』を調べ、吃音のタイプにも話題を広げる等、絵本を用いて吃音の知識を深めた。ことばの教室での学習について説明する時には、『どもってもいいんだよ』の絵本をクラスで回して友達に見てもらおうことを本児が考えた。本児は、家族や友達、担任に支えられ、安心して発表をすることができた。

卒業を控えた3月には、ことばの教室での学習のまとめとして、『中学生になるきみへ』と一緒に読んだ。以前は、あまり吃らないから中学に行って自己紹介で吃音のことを言うかどうか考えていないと話していたが、絵本を読んでから感想を求めると、「必要があったら話す。自己紹介の時に噛んだら、ちょっと（吃音のことを）話してみようかなと思う。その時思いつかなかったら、担任の先生に「噛むことが多いから普通に聞いて欲しい」と言う」と話した。中学校の先生に話すかどうかについても、以前はあまり考えていないと言っていたが、「(吃音というのがどういうものか)自分で伝えようかと思っている」と話した。最後に吃音のある後輩に何か伝えたいことがあるか尋ねると、「この本は中学のことが書いてあって分かりやすい。参考になると思う。『これからの人生、…乗り越えていける。…君にもそれができると信じてるよ』を伝えたい(共感した)」と話した。本児は中学校に入学してすぐに、この本を持って担任に吃音のことを話しに行ったと聞いている。

事例(5) 吃音についていろいろな人の考えを知りたがった子ども

小学校6年生 男子 使用教材『中学生になるきみへ』

1年生より通級。繰り返し、引き伸ばし、つまりの症状が見られる。

本児はこれまでの指導の中で『どもってもいいんだよ』『どもるってどんなこと』は読んでいた。また、グループ学習では、他の吃音のある児童とのかかわりをもつことができていた。さらに吃音理解のためのDVD教材の『ただ、そばにいる』⁽³⁶⁾も視聴し、高校生や大学生の体験等をもとに、吃音について考えを深めていた。

卒業を控えた3月、ことばの教室での学習のまとめとして、『中学生になるきみへ』と一緒に読んだ。中学校に見学に行ったばかりで、中学校生活についてイメージし易い様子だった。絵本の内容ごとにどうしたいと考えているかを聞いた。「吃音のことを話す」かどうかについては、「迷っている」と話した。「学校の先生にどうやって伝える」かは、親から話してもらいたいと考えていた。『中学生になるきみへ』が欲しいと話したため、担当者が本をプレゼントするととても喜んだ。本には先生向けのリーフレット⁽³⁴⁾が印刷されているので、必要な時にコピーして渡すように伝えた。本児は「今度『きよしこ』⁽⁷⁾を読んでみようかな」と話し、今後も吃音についていろいろな人の考えを知りたいと思っている様子だった。

事例(6) 自分の吃音に向き合った子ども

小学校6年生、男子 使用教材『中学生になるきみへ』

3年生の途中から通級。繰り返し、つまりの症状が見られる。家族が、本児の話すのを聞いていて、苦しそうとを感じるほど家庭ではどもることがあるが、学校では全くどもることはなく、担任の先生は本児がどもるということが信じられないと話した。最初は保護者や本人が気にしすぎなのではないかと思っていたようだが、担当者が在籍学級訪問を重ね、担任の先生も次第に本児の吃音を理解するようになった。学級の中での本児は、おかしいことを言って友達を笑わせる等、よくしゃべる児童だった。学校では吃音が出なかったため、だれも本児の吃音に気付くことはなかった。特に言い換えをしなくても、学校では吃音が出ないとのことだった。だからこそ、本児は吃音をオープンにすることにためらいがあった。吃音があるから通級していると、友達に言いたい気持ちはあったものの、それをきっかけに、友達が自分の言葉に注目するようになると、緊張すると思うとのことだった。リラックスしているときに吃音が出やすく、学校では、友達と話しているときに吃音が出そうになることがあると話した。本児には、学校でもいつか吃音が出るのではないかという不安がいつもあった。吃音には波があり、「最近、友達と話している時、めっちゃ出そうです。」と言うこともあった。学校の帰り道に仲の良い友達に「今みたいにつまることがあるんだよ。」と打ち明けたところ、友達は聞いてくれたが、気にする様子ではなかった。

ことばの教室では、どもりながら会話を楽しんだ。一方、初めて父親が通級に付き添った時に、父親も吃音で苦労してきたことを担当者に話した。現在は吃音をコントロールできるようになったため目立たないが、自分としては、今も吃音があると思っているようだ。現在は会社で500人を前に話をすることもあるが、電話の対応は、今でも苦手意識があるとのことだった。父親が自分の吃音体験を本児に話したことはなく、本児は、父親に吃音があることを知らないと思うとのことだった。父親は、「このことを息子に話していただいて構いません。」と話した。自分からは言うタイミングが難しいとのことだった。次の通級時に、担当から父親にも吃音があることを話し、父親も理解者の一人で相談できる人であることを伝えた。本児は、次第に自分の吃音をマイナスだけではないと受け止めるようになっていった。本児は私立中学に行くことになった。その頃、吃音のある人の体験集『どもるあなたに』⁽¹⁴⁾を読んだり、DVD『ただ、そばにいる』⁽³⁶⁾を観たりし、「小学生でも吃音に向き合っているのに、自分はまだまだだ。」と語った。中学校に入学する直前に、『中学生になるきみへ』と一緒に読み、中学に行ったら自分から周囲の理解を求めていきたいと話し、先生に渡すと言って、リーフレット学童編⁽³⁴⁾を持って卒業していった。

第5章 まとめと今後の課題

本研究では、「吃音のある児童の指導に関する実践的研究」として、児童と指導者が共に吃音に向き合うために開発した教材について、その有効性をアンケート調査と教材の活用事例から考察した。

平成15年以降発行された4種の教材（絵本3種とすごろく）は、表1の通り、全国の多くの機関で利用されている。今回のアンケート調査は、過去2年間に当該教材を購入した「ことばの教室」等の機関に調査を依頼し、吃音指導を行っている236名の指導者から回答を得て、分析を行った。また、教材の活用事例は実践の中から、代表的な事例をまとめて報告した。

1 教材の有効性について

「吃音に向き合うための教材」は、過去の「吃音を意識させない指導」に対して、吃音に悩み、意識している子どもたちに、指導者自身が胸を開いて吃音を話題にし、子どもの思いに寄り添った指導を展開するための教材である。

アンケート調査の結果からは、4種の教材について、①子どもと吃音について話がし易くなった（9割以上の回答者）、②教材を使用することによって、子どもが吃音について話をした（9割以上の回答者）、③教材の使用後、吃音の話をする子どもがいた（6～7割の回答者）、④教材の使用後、吃音に対する考え方が変わった子どもがいた（4～6割の回答者）等の傾向が明らかになった。

4種の教材は、指導者と子どもとの間で吃音を話題にするきっかけを提供する役割を十分に果たし、さらに、その後の子どもの変容にも影響を与えていると考えられた。使い勝手や取扱う内容には反省や課題もあるが、4種の教材は、指導者にとっても子どもにとっても吃音に向き合うきっかけとなり、その後、吃音について話し易くなったという結果をもたらしている。このことは教材の有効性を端的に示していると考えて良いだろう。

2 それぞれの教材の効果と子どもの反応から

最初の絵本『どもってもいいんだよ』は、吃音について子どもと話し合うきっかけ作りの教材として、試作本を作って実際に使い、改良を重ねて作成した教材である。今回のアンケートにも、子どもの反応として「僕もこうなることがあるんだ」、「自分だけじゃなかったんだ」といった発言が記述されており、作成の意図にかなった教材であったことが再確認された。

教材の活用事例では、保護者と吃音について話をしたことがない子どもが、絵本を読むことを通して、自分の吃音について話ができるようになり、家族も学級担任も吃音への理解を深め、環境調整に配慮ができるようになったと報告されている。まさに、吃音に対する本人や周囲への考え方を変えるきっかけを作る教材となっていた。

『どもるってどんなこと』は、吃音に関する正しい知識と必要な情報を提供することをねらいとして作成されている。吃音のタイプや症状の波があることを知り、「自分もある」と同感する、あるいは、「吃音に悩む人が100人に1人いることに安心する」等の回答を得、子どもたちの疑問や不安に向き合い、吃音に関する客観的な事実を伝えていく大切さが示唆された。

ただし、「吃音が治ることに対する考え方」「どもる自分を受け入れる」「自分の吃音を語る」ことについて、子どもに説明したり話し合ったりする難しさがある、との指摘は注目すべきものである。これらは、正解があるものではなく、指導者として常に自問自答しながら、また子ども一人一人の状況に応じて、共に考えていくべきものであろう。今後欲しい教材の一つに、先人の体験談や手記等を望む声が多い。これらの声に対する教材作成も今後の課題として考えるべきものである。

『中学生になるきみへ』は中学校進学を控えた時期に読んで欲しいとの意図から作成した絵本である。中学校のイメージをもつことにつながり、また、友達とどう付き合うか、先生にどのように吃音について伝えるか等について、話し合いがもてたとの回答を得ている。教材の活用事例には、中学校に入っただけで、自分から担任に吃音について話しに行った子どものエピソードが記載されている。中学校には言語障害の通級指導教室が少ない中で、小学校のことばの教室の教材として、また、進学後の中学校への吃音の理解啓発のためにも活用できることが確認された。

『すごく！すごろく』はすごろくをしながら他の子どもと吃音について話ができることを目的として開発されている。楽しく取り組める教材であるとの意見が多く寄せられ、子どもの実態に応じて使い方を工夫しているとの回答も多かった。教材の活用事例では、個別指導でも使い、子どもなりに様々な表現で吃音の状態を語ったり、相談相手を教えてくれたりする等、吃音について話しやすい状況を自然に作っている様子がかがえた。また、個別指導では話さなかったことも、グループ活動では自主的に語る等の回答もあった。絵本の教材に比べ、他の子どもたちの意見を聞けることや、多様な考え方に触れ合うことができる点で、本教材を作成した意義は大きかった。

3 吃音の指導者に関して

アンケート調査では、回答者の経験年数や吃音指導に関する考え方について質問した。その分析から、現在の吃音指導に関する現状と課題を考察する。

回答者の3分の2が言語指導に携わって7年以下であり、これまでに吃音のある児童を担当した人数も、大半が10人以下であるという結果であった。さらに、吃音指導を「難しい・やや難しい」と感じる回答者が86%にもなっている。

経験が少ない中で言語障害に関する指導を行わざるを得ない状況があること、そして言語指導に関わる指導者の育成が急務であることが浮かび上がる。一方で、回答者の多くは、言語指導の担当になった比較的早い時期に、4種の教材に出会いそれらを使用することになり、吃音の指導において、「子どもと吃音について話し合うこと、吃音に向き合う大切さ」を知ることになったとも考えられる。この点からも、多くの回答者が、教材に関する有用性を記述したのであろう。

4 今後の吃音指導の在り方をめぐって

吃音指導においては、子どもとともに吃音に向き合うこと、吃音を話題にしながら子どもに寄り添った指導や支援をしていくことの大切さに異議を唱える指導者は少なくなってきた。これは先人達の啓発もさることながら、本研究で取り上げた4種の教材の普及がかなり影響しているものと思われる。今後も更に研究と実践を重ね、吃音のある子どもたちやその家族が安心して受けられる指導の場と教材、そして、当然のことながら指導者の養成を考えていく必要があるだろう。

教材に関しては、比較的経験年数の浅い回答者は「吃音の理解や自己理解を促すもの」を挙げているのに対し、中堅の回答者は「吃音症状等に対するアプローチ」を望んでいる。さらに、経験の長い回答者は、手記や体験談等の充実を希望し、吃音者自身の考えや生き方から、子どもの今の気持ちや将来について話し合える教材を望んでいた。これらすべてに応じていくことは困難なことであるが、吃音指導に従事している指導者同士のネットワークを確立していくことが、今後必要なことであろうと考えられる。

「吃音症状等に対するアプローチ」については、様々な方法が考案されているものの絶対的な方法はないといってよい。まずは子どもの「治したい」という気持ちに寄り添いながら、楽に話せる方法を一

緒に探していくことが大切であろう。その関わりの中で、更に子ども自身が、吃音に向き合えるようになり、吃音を隠そうとせず、吃音があっても自分のやりたいことに積極的に挑戦し、自己を肯定する人になるように支援するのが私たちの役割であろうと考える。

多くの指導者にとって難しいと言われる吃音指導の在り方について、今後も様々な分野からの研究が積み重ねられ、より良い方向が見いだされると考えられる。私たちは、日々の教育臨床活動を通して、一人一人の子どもたちと密度の濃い関係を結びながら、よりよい方法を模索していきたい。

参考文献（出版年度順）

- (1) 『吃音児の指導事例集』財団法人心身障害児教育財団 1986
- (2) 『もしおさんがどもったら』長澤泰子訳 全国ことばを育む親の会 1986
- (3) 『吃音児の指導 楽に話すことをめざす指導のありかた』財団法人心身障害児教育団 1988
- (4) 『君は、どもる？ 10代の吃音者のために』船橋市言語障害児・者の会訳 1992
- (5) 『学齢期の吃音指導』C.W.デル著 長澤泰子訳 大揚社 1995
- (6) 『論理療法と吃音』石隈利紀・伊藤伸二著 芳賀書店 2001
- (7) 『きよしこ』重松清著 新潮社 2002
- (8) 『子どもとともに吃音に向き合うための教材開発の試み 絵本の作成を通して』
第40回日本特殊教育学会論文集 2002
- (9) 『子どもとともに吃音に向き合うために 絵本「どもってもいいんだよ」作成の過程を通して』
第41回日本特殊教育学会論文集 2003
- (10) 『シリーズ言語臨床事例集9 吃音』盛由紀子・小澤恵美編 学苑社 2004
- (11) 『子どもがどもっていると感じたら』廣寫忍・堀彰人編著 大月書店 2004
- (12) 『子どもとともに吃音に向き合うための教材開発の試みⅡ 絵本の作成を通して』
第43回日本特殊教育学会論文集 2005
- (13) 『学齢期における吃音児の自尊感情の発達』太田真紀・長澤泰子 特殊教育学研究
第43巻第4号 2005
- (14) 『どもるあなたに ようこそ言友会』NPO 法人全国言友会連絡協議会編 2007
- (15) 『キラキラ どもる子どものものがたり』堅田利明著 海風社 2007
- (16) 『吃音のある子どもの自己肯定感を支えるために』独立行政法人国立特殊教育総合研究所 2007
- (17) 『吃音の基礎と臨床 総合的アプローチ』B.ギター長澤泰子監訳 学苑社 2007
- (18) 『言語聴覚療法シリーズ 改訂吃音』都筑澄夫編著 建帛社 2008
- (19) 『どもる君へ いま伝えたいこと』伊藤伸二著 解放出版社 2008
- (20) 『学齢期の吃音指導・支援』小林宏明著 学苑社 2009(24)
- (21) 『吃音のある子どもたちへの指導 子どもに届けるメッセージ』青山新吾著 明治書店 2009
- (22) 『吃音ワークブック』伊藤伸二他編著 解放出版社 2010
- (23) 『ボクは吃音ドクターです。』菊池良和著 毎日新聞社 2011
- (24) 『子どもの吃音 Q&A 第3版』長澤泰子・中村勝則訳 全国ことばを育む親の会 2011
- (25) 『(吃音のある) 子どもに向き合うために』中村勝則著 全国ことばを育む親の会 2011
- (26) 『エビデンスに基づいた吃音支援入門』菊池良和著 学苑社 2012
- (27) 『吃音は治せる』都筑澄夫著 マキノ出版 2012
- (28) 『吃音・非流暢性障害のある子どもの理解と支援』小林宏明・川合紀宗編著 学苑社 2013
- (29) 『吃音のこと、わかってください』北川敬一著 岩崎書店 2013
- (30) 『キラキラ続編 どもる子どものものがたり 少年新一の成長記』堅田利明著 海風社 2013
- (31) 『吃音とともに豊かに生きる』伊藤伸二著 全国ことばを育む親の会 2013

DVD・リーフレット・教具

- (32) 『吃音と子どもたち(DVD)』医学映像教育センター 2007
- (33) 『吃音相談シリーズ・幼児編～うちの子はどもっているの？～』ことばの臨床教育研究会編 2007
- (34) 『吃音相談シリーズ・学童編～どもる子どもがクラスにいたら～』ことばの臨床教育研究会編 2008
- (35) 『どもりカルタ』日本吃音臨床研究会
- (36) 『ただ、そばにいる(DVD)』企画制作 北川敬一 2011

統計資料

- (37) 『特別支援教育資料(平成23年度)』文部科学省 2012
- (38) 『平成23年度全国難聴・言語障害学級及び通級指導教室実態調査』国立特別支援教育総合研究所 2012

資料1 作成した4種の教材の目的と概要

1) 『どもってもいいんだよ』



『どもってもいいんだよ』表紙



『どもってもいいんだよ』

『どもってもいいんだよ』は、吃音の話をするきっかけ作りをするための教材として平成15年に刊行された。平成25年4月現在、約3250冊が頒布されており、最も多く指導現場で活用されている。

これまで、多くの指導者が、子どもと吃音の話をしたいと思いつながら、どのようなことを、どのように話題にしたらよいかを指導上の課題となっていた。この教材は、こうした指導者の課題に応えるものとして開発された。子どもが自分の吃音について感じている否定的な感情を受けとめるとともに、吃音は悪いことではないこと、どもってよいこと、吃音があるのは自分だけでないこと、吃音の受け止め方も様々であること等を子どもに伝えている。そのことを保護者も教師も一緒に考えていくきっかけになることを意図して作成されたものである。

子どもにも親しみやすいように、マンガ仕立ての絵本教材である。子どもや教師、家族や学校の友達等を登場させて、子どもがよく経験すると思われる事柄をエピソードとして描いている。たとえば、左の図のエピソードは、3年生ののり君が友だちからどもる理由を尋ねられた場面を取り上げ、のり君の対応した様子を描いている。絵本の最後は、「こんどはきみの話をききたいな。」と結ばれており、子どもと教師が話し合うきっかけを提供している。

教材の発行に当たっては、事前にことばの教室の指導者に使用してもらい、その感想を活かして、絵本の内容の更なる吟味を行った。また、「使い方の手引き」が添付されており、絵本を子どもに読み聞かせるだけに終わってしまうことがないように、絵本教材の目的、使い方、子どもの反応の例と対応の仕方等を記述し、子どもと吃音について話し合うきっかけにすること、子どもの気持ちをありのままに受け止めること等が説明されている。

2) 『どもるってどんなこと』



『どもるってどんなこと』表紙

『どもるってどんなこと』は、吃音について子どもにも分かる知識絵本として、平成17年に刊行され、約2750冊が頒布されている。この教材は、『どもってもいいんだよ』に続いて使用し、吃音について話し合うことができる子どもを対象としている。

『どもってもいいんだよ』と同様に、マンガ仕立ての絵本教材である。吃音について、子どもが疑問に思うことに答え、吃音についての正しい知識を伝えるための絵本である。

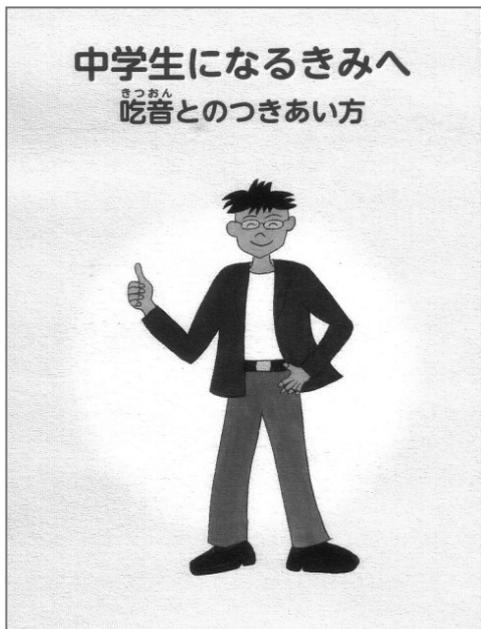
内容は、①吃音のタイプ、吃音の波などどもり方には人によって違いがあること、吃音の原因はまだよく分かっていないことなどの基本的な知識、②吃音が治るとはどんなことか、吃音に対して何ができるか、吃音への対応の仕方、③吃音のある人はたくさんいて、様々な職業に就いて活躍していることなど将来像に関すること、④自分のことばで吃音について語れるようになることや吃音に向かい合うことの大切さなどが取り上げられている。併せて、保護者、担任の先生への子どもとの接し方について説明されている。

下の図は、子どもの将来像への疑問に答えるページで、吃音があってもやれない仕事はないことを伝えている。



『どもるってどんなこと』

3) 『中学生になるきみへ』



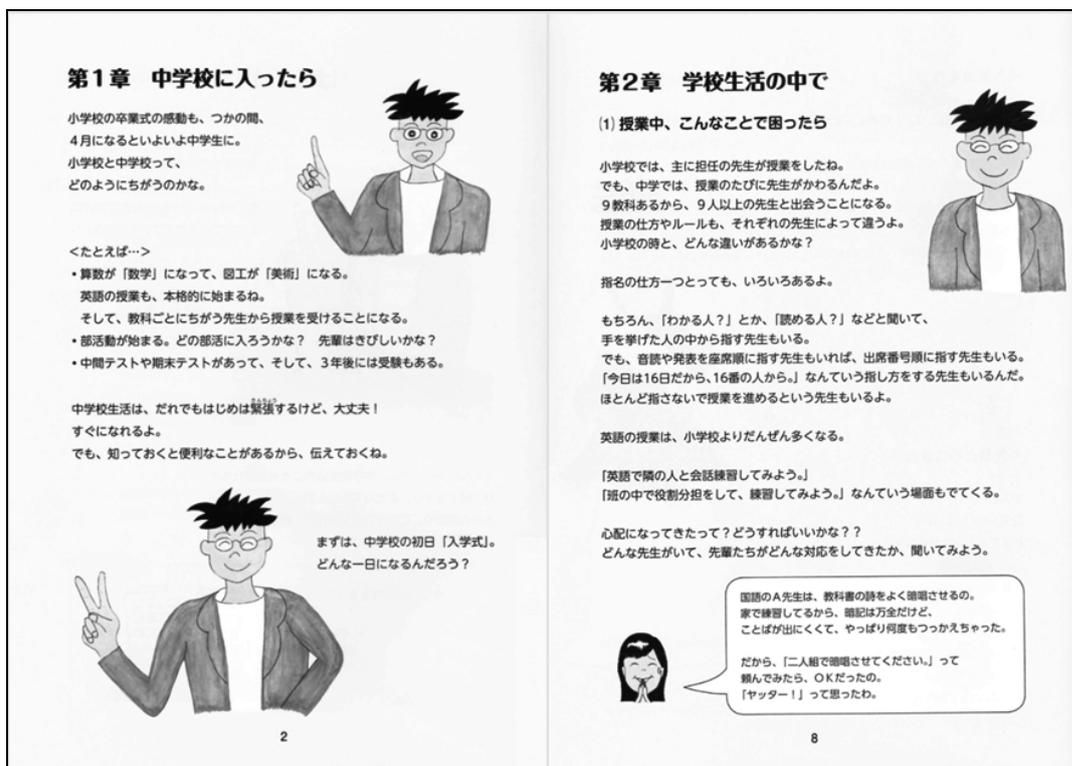
『中学生になるきみへ』表紙

『中学生になるきみへ～吃音とのつきあい方～』は、中学進学に向けて、中学校生活を紹介したり、対策を考えたりするための教材として、平成22年に刊行され、約1300冊が頒布されている。

もうすぐ中学生になる子どもが抱くと思われる中学校生活への疑問や不安に応えるための教材である。

第1章「中学校に入ったら」では、中学校生活の初めに経験する入学式、自己紹介、部活動の説明や対応の仕方が、第2章「学校生活の中で」では、吃音で授業中に困ったときのこと、吃音についての先生への伝え方や友達への対応、吃音で悩んだときのこと等を取り上げ、その考え方や対応の仕方が説明されている。

下の図のように、中学校と小学校との学習や生活の違いや授業中困ったときの対応について、ことばの教室の先生から説明したり、先輩の話を開いたりする形式をとっている。



『中学生になるきみへ』

4) 『すごく!すごろく』

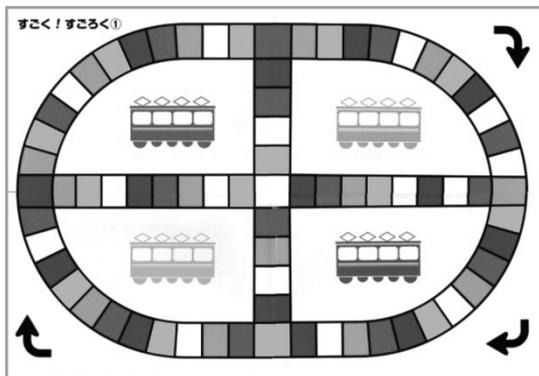


『すごく!すごろく』表紙

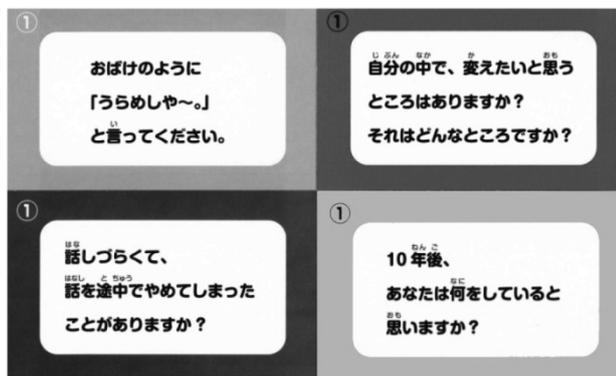
『すごく!すごろく』は、吃音や自分の思いを気軽に話すことができるようにするための教材として平成24年に刊行され、総数350セットが頒布されている。

吃音について話せるようになった子どもを対象に、子ども自身が吃音のある自分を肯定的に受け入れられるように支援するための教材である。

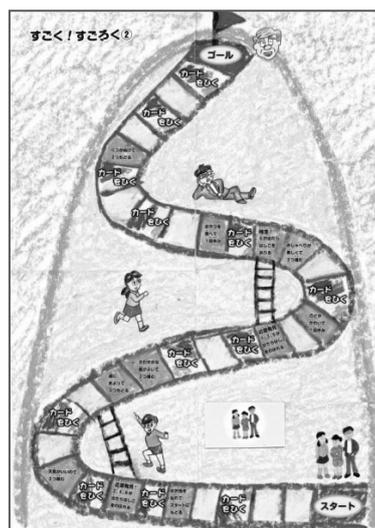
すごろく形式でゲームを進め、下図のカードの指示によって、自分の吃音や吃音のある自分を振り返ったりする場面、色々な声の出し方や話し方を体験する場面、現在の自分を見つめたり、将来の自分を想像したりする場面等を設けている。



『すごく!すごろく』ゲーム盤①



『すごく!すごろく』カード(例)



『すごく!すごろく』ゲーム盤②

資料2 実施したアンケート用紙

チェック項目	教材名	どもっていいんだよ	どもるってどんなこと
お持ちの教材に○をつけてください			
○をつけた(お持ちの)			
使用の仕方について	使った場合は○ 使っていない場合は× をつけてください	個別指導	
		グループ指導	
		保護者への説明	
		保護者(本人)に渡した	
		在籍校担任への説明	
その他の使い方 (具体的にお書きください)			
教材を使用した時の様子	各々の教材を使った時の様子や反応をお書きください。 例: ・【けんかの時ほどもりにくい】の場面で、 「まくも同じだ」と自分から話し始めた ・興味を示さず、他の話を始めた ・保護者から、「とてもわかりやすく、クラスの友達にも読んでもらいたい」と言われた ・在籍校の担任の先生に渡すと、ちょっと迷惑そうな顔をされた		
教材の使用効果について	これらの教材を使ったことで		
	①先生自身、子どもと吃音の話がし易くなりましたか?	はい・いいえ	いい・いいえ
	②吃音の話ができた子はいましたか?	いた・いない	いた・いない
	③その後、自分から吃音の話をするようになった子はいましたか?	いた・いない	いた・いない
④その後、吃音に対する考え方が変わった子はいましたか?	いた・いない ↓どのように? ()	いた・いない ↓どのように? ()	
これらの教材を使ったことで、上記以外に具体的な効果(反応)がありましたら、お書きください。			
教材を使った感想 とても良い◎ 良い○ あまり良くない△ 悪い×			
具体的な感想をお聞かせください			
・良かった点 ・使いにくかった点 など			

中学生になるきみへ	すごく! すごろく	リーフレット (保護者向け)	リーフレット (担任向け)
か)教材について、以下にご回答ください			
はい・いいえ いた・いない	はい・いいえ いた・いない	はい・いいえ いた・いない	はい・いいえ いた・いない
いた・いない	いた・いない	いた・いない	いた・いない
<u>いた・いない</u> ↓どのように? ()	<u>いた・いない</u> ↓どのように? ()	<u>いた・いない</u> ↓どのように? ()	<u>いた・いない</u> ↓どのように? ()

以下のことについて、教えてください。

- 1 記入された方の所属を教えてください ・「ことばの教室」 ・ その他 _____
- 2 あなたの言語指導の担当者としての経験年数は？（ _____ 年目）
- 3 現在担当されている吃音のあるお子さんの人数は？
・ 幼児（ _____ 人） ・ 小学生（ _____ 人） ・ 中学生（ _____ 人）
- 4 あなたがこれまでに担当された吃音のあるお子さんの人数は？
・ 5人以下 ・ 6～10人 ・ 11～20人 ・ 21人以上
- 5 吃音指導について、どのような印象をおもちですか？
・ とても難しい ・ やや難しい ・ どちらとも言えない ・ それ程難しくない ・ 難しいと思わない
その理由は？ _____

- 6 今回のアンケートでうかがった以外に、吃音の指導で使用されている教材を教えてください。

- 7 今後、どのような教材があるとよいとお考えでしょうか？

☆今後、研究を進めるに当たって必要な場合、ご連絡させていただいてもよろしいでしょうか？<はい・いいえ>

<はい>の場合

連絡先：【学校名】 _____ 【電話】 _____ （お名前 _____ ）

ご協力ありがとうございました。 7月20日までに投函をお願いいたします。

資料 3 アンケートに回答された自由記述の一部

1) 『どもってもいいんだよ』 (1) 児童の様子

記述から、子どもが絵本を受け入れていいると考えられた内容

絵本の場面	記述
タイトル	タイトルで一安心した子どもが多かった 「どもってもいいんだよ」の本の題名に、「なんで?どもってたらダメだよ」と話してくる子がいた。表紙から話題のきっかけ作りになった
幼少期・発食・家庭での対応 (p.2~5)	自分が覚えていた吃音に初めて気付いた時のことを話した 保育園の時からもともと自分と友達 家庭での対応について、「ゆっくり」と言われたなどと語っていた子もいた 「お・お・お・あ・あ・あ」のところ→自分がどもったときのこと、家族の反応を話してくれた 「スラスラ」と話せるときもあるんだ」というページで、自分は〜と話できた スラスラ話せる時の場面→独り言は、人を待たせなくていいから、あせらなくていいと語っていた 「吃音の波」についてそのことが実感できていた 「吃音の教室」に行った所で、「僕と同じ」と言った
吃音の波 (p.6~7)	ことばの教室での学習場面→「一緒だね」と本人から話が出来た ことばの教室」がいろいろなところにあるとあって、そこにたくさんのおもちゃの子どもが通っていると知り、「ぼくだけじゃないんだ」と思った感想が聞かれた 話し合いがない場面→恥ずかしいからと話していた 「言っちゃいけないことだと思ってた」というところに共感する子が結構いる 「友だちに話し方をまねされて頭きたんだ」という場面で「ぼくはいいな〜」とつぶやきようになった
ことばの教室へ行く (p.8~15)	「学校で話し方についてからかわれた」とボンッと話した。その時の気持ちや対応について考えることができた。在籍校との連携がすぐ取れた みんなですごころくしているところをみて、「次のグループでやってみよう」と言った 16ページ〜23ページのけんちゃん、きみちゃん、のりくんの話を熱心に読んでいた 各学年の体験談のようなページの内容を読んだときに、「そうそう、私もそうなんだ」と共感していた P16〜23までの中で「自分もそうなるよ」(学芸会や音読、友達のこと)と話せる子がいた きみちゃん、のり君の話に興味をもった様子だった
子どもとの体験談 (p.16~23)	「○○ちゃんの話」では、自分も同じだと反応し、安心した様子だった 「○年生の話」を読んで、自分も書きたいと言って書いた(四コマ漫画) 1年生の話、3年生の話、のページで、自分の体験と重ねてやりとりできた 学校行事のページで「ぼくもできた」とか「ぼくも先生や親と話をした」とか自分から言い出した 学芸会に対する意見を話し合うことができました 学芸会の台詞について、一緒に作戦を考えると意欲が多くなった 学芸会の場面で自分はどうだったか話し始めた 「ぼくは○行が言いにくい」と話した。今まで吃音の話題になると「大丈夫」の一言だったので、良いきっかけになった 言いにくい音がある場面→「ぼくはヤ行とか「オ」とかか言いにくい」と話していた 「サンスオン、ハヒフヘホが〜」のところでは、「ぼくは出しにくい音がちがう」と話することがあった サンスオン、ハヒフヘホが最初にあるといつも「出しにくいな→「チ」が最初につくと出しにくいな」と自分の吃音について話し始めた サンスオン、ハヒフヘホが最初にあるといつも「出しにくいな」→「ぼくは、あいうえおだ」と話すきっかけになった 「さいしょのことばが出しにくい」というページを読んでいるときに「ぼくもはじめのことばが出しにくいよ」と自分の経験を話していた 「1ねんせいのけんちゃん」の巻の場面で、「ぼくは、年長さんの発表会で、ことばのれんしゅうをしている時に、つまるところようになったよ」と話し始めた 「きみちゃん」がぬいぐるみ投げのシーンでは、わらいながら自分はどうするかとつぶやきかえっていた

「どうしてどもるの?」と自分も聞かれたことがある、その時こう答えた「なに、子どもが話をする時のきっかけしていない 「なんでそんな話し方するの?」と聞かれた時に、クイズにして聞き返すという方法もあると気づいて、試してみようとしていた子がいた 「どうして?」とクイズの子に聞かれた時、けんちゃんと同じように「さあ、どうしてでしょう?」とクイズにして返答したという話を保護者から連絡帳で知った 読み聞かせをしている間は、連方を向いていたが、「3年生ののり君の話」になったら、「自分もあった」と言った 「友達にことばのことを話してみようかな」と言った 吃音の原因について様々な意見がでていた P24~25の文「君の話をきかせて」で、吃音について話し始めた子もいた どんなことを話したいのか、本の男の子の話を聞いて、話す内容(吃音のこと)が明確になったようだ 自分の吃音の様子をことばでどう表現していいかわからなかった子が、「これと同じ」と表現できた 自分と比べながら読んでいた。友達に「これがぼくの話し方」と言うようになった 自分から「どもってもいいんだよ」を読みたいと言ってきた 自分から吃音のことを話し始めることはあまりない児童だが、「もう1回読んで」と読み終えた後に言うことが何度かあった とても興味をもって「ふーん、そうなんだ」と話したり、次の時間も、また読みたがる子がいた 「自分と同じ」「自分とは違う」のどちらの反応もあった。「どもる」ということばを初めて聞いた子もいた 自分の状態と比べて、「同じだ」とか「それはいいな」とかの反応が引き出された。意外な本音も聞けた 「ぼくと同じだ」「少しがうなど自分とくらべての感想を話してくれた それぞれの登場人物のエピソードを読みながら、これは自分に似てる、これはないかな、と話すことができた 「そんなことはないよ」「へえ〜そうなんだ。」(自分との違いを知り、話す。) 自分の事と比べて読み、自分もそうだと自分の場合も…とことばにした 子どもが、自分の場合はこうなんだ」と吃音の話をしてくれた 児童自ら、「自分は〜だった」とか話した 自分は「こう」とはならないよ」と言っていた 「自分は〜」と自分に当てはめて話し始めた グループ学習で各自の初吃の時の話や、現在までのできごとを話す機会となった 言葉について児童の側から話し始めた。(もともと話題にはびこっていました。)例:「ぼくは、く、くとかはならないけど、くーとかはなな。」等 言葉について児童の側から話し始めた。現在までのできごとを話す機会となった 初めて話題にした時は、あまり興味を示さなかったが、学年が上がったときに、再度この本を挟んで話をした時、自分のいやだった経験を話してくれた。一つステップを上がったような気がした 初めは、読みながらなかったが、数回指導した後再度読も、「そうなんだ」と受け入れていた 「同じだ」と自分から言った 「ぼくも同じ」と自分から話し始めた 「ぼくも同じ」と言うことが多い 「ぼくもある」とぼそっと言った 「ぼくと似ている」などの声が聞かれた 「僕と同じだ」と児童からの発言により、児童が自分の吃音について、話すきっかけになりました 「私と一緒に」と共感しながら聞いていた。その後自分のエピソードも話した 絵本に出てくる子どもを指さし「これ自分と一緒にだ」「自分もこうゆうことある。」と話してくれることがあった 「私もこんなことある」とどもることを伝えてくれた 「ぼくもこんなことがあるよ」と自分のことを振り替えられるようになった 「ぼくも友達に言われたことあるよ」と話し始めた 自分も同じ、こんなこともあるよ、と話がぶくらんだ 「へー」と感じて「自分だけじゃなかったんだ」といった反応をした 「自分だけでないんだ」と言っていた 何か困ったことがあるか、こんな方法もあるんだ、こんな人もいるんだなど具体的に話が出来た	「君の話を聞かせて」(p.24)
--	------------------

全般

<p>吃音についていえず、あまり話したことがなかったので、話さきっかけになっただ。(お母さんと話した。)</p> <p>保護者も「子供と話すきっかけになっただ」と言っていた</p> <p>「このことについて、優しく教えてもらってうれしかった」と宿題の日記に書いていた</p>

記述から、保護者や担任、担当者が絵本を受け入れていたと考えられる内容

<p>保護者が抱える不安や悩みが軽減された</p> <p>親がゆっくり何回も読みたいと言って借りていった</p> <p>保護者が「絵と短い文で、内容はしっかり伝わってくるのでいいですね」と言われた</p> <p>保護者にも説明がしやすかった。また、保護者からブラスアルファの話も聞けた</p> <p>担任「読んでみたいと言われない」と言われた</p> <p>保護者から「出し出してくれよこんでもらって</p> <p>保護者からは、どれも悪いことではないという肯定的な意見を聞くことができた</p>
--

記述から、子どもが絵本を受け入れていたと考えにくい内容

<p>吃音にふれると、余計意識するため、ふれて欲しくないと反応していた</p> <p>あまり興味を示さず、途中で読むのをやめた子もいた</p> <p>表情にこわばった様子があったので、使用は休み、しばらく時間をとることにした(小1男子)</p> <p>「僕は、こんなことはない」と、自分はどきどきない様子で目をむける感じ</p> <p>受け入れ難いよう自分と比べてもできない様子で目をむける感じ</p> <p>「このグループでは、どっちも平気」という場合、まだ通って1年経たない子は、なかなか理解されにくい</p> <p>どれもことに罪悪感を親子ともども感じていたのが最初のうちはなかなか心から信じてはもらえなかった。継続しているような文章やパンフレットを読んでいくうちに「本当なんですね」と安心して、これまでの苦しみも語られるようになった</p> <p>平静を装っていた子がいた</p> <p>避けるように話題を変えた</p>
--

記述からは、子どもが絵本を受け入れていたかどうか判断しにくい内容

<p>幼児の療育施設(福祉センター)の先生がこの本を使用して入級前に対応されているようで、保護者も子どもたちも「あ、これ見たことある」という反応をよくしている</p> <p>読み終えると別の話を始める</p> <p>6年生にこの本を示したところ、登場人物が「年生」ということで、話に乗ってこなかった</p> <p>淡々と読み、「どっちも面白いんだと思った」という感想でした(本人のニーズがうすかったようです。)</p> <p>「どうしてどっちもか知りたい」「友人になぜ子どもも聞かれた困ったことがある」という児童に使用、本を見せると、「読んでみたい!」読み終わった後、静かでも反応は薄かった(このときの本児が求めた解答ではなかったためか?)</p> <p>「そんな分かってるよ!」みたいなのを返す</p> <p>自分の弱いところを出せない、見せられない子に読み聞かせたが、まだ、吃音を受け入れることができず、「別に…」という状態</p> <p>興味を示さず、「ふーん」という感じだった。吃音が出た時は、風邪を引いているから調子が悪いと言おうようにして話した。別に気にしていないという反応を示す子もいた</p> <p>最後まで読んで「へえ、そうなんだ」と反応する</p> <p>「ふーん」というかんじで読んでいたように思う</p> <p>感想を聞かれても困っていった</p>
--

その他の内容

<p>アンケートにすぐ熱心に取り組み児童と直感であり考えずに回答する子、あまり答えたくない子など、反応はそれそれだった。それらの行動から、切り込んだ質問のタイミングを計っている</p> <p>自分にも同じ場面があったのか、自分とは異なる場面であるのかを教えるにしながら読み進めると、その子の吃音の状況が互いに捉えやすくなった</p>
--

1)『どっちも面白いんだよ』(2)使用効果

内容	記述
子どもの様子	<p>考え方が変わったかと言われないが、どの子も表情が明るくなったり、声に元気が出たり遊びがリラックスしたり家庭でも学校の話題や友だちの話が増えたなどの報告を聞くことが多い</p> <p>どうしてそういう話し方になるの?と聞かれることを怖れなくなったり</p> <p>自分以外にも同じように子どもとの存在を知ったことは大きかった(グループ指導未経験、新人総児で)</p> <p>吃音理解に、とても分かりやすく、子どもにも抵抗がなかったと思う。この本を読んでから、吃音の様子を時々聞くことができた。その後子どもが自分自身をよく見ること、テレビなど祖父母のアドバイスまで受け入れていくようになったと感じる</p> <p>どれもこれも恥ずかしいことではないんだ、と話題の中で自分でも言えるようになった</p> <p>どっちも悪いことではないという言葉を聞いた(というよりも大切だと感じた)</p> <p>担当や仲間(同級生の吃音の子)と読み進めていくうちに、友達と自分のどっちの差を発見した</p> <p>自分からは話さないが、聞かれると、あんまり出なくなった。気にならないうと書いていた</p> <p>自分から…というのではないが、最近ことばの調子はどうか?と聞いた時の反応がよくなくなったように思う</p> <p>吃音のことを話すときに、さらに話すようになった</p> <p>吃音のことを話して気堅に話しているのだから子どもが思えるようになった</p> <p>吃音のことを話してはいていけないと思っていた様子が変わり、少しずつ話せるようになってきた</p> <p>やっ、吃音に目を向けることが、少しできはじめた</p> <p>来る度に、自分の状態を自分から話している</p> <p>読んだ後、本の内容を例にしながら、吃音について話すことができた</p> <p>この本をきっかけが変わったのではなく、自らの体験から変わったようだ。その事実を語ってもらうきっかけにはなった</p> <p>吃音についてことばの教室の先生方が作った教材があるということが、子どもや保護者、担任に好意的に受け取られ、信頼関係が増すという面があったと思う</p> <p>保護者から「日本中の人に、このことを知ってもらえたら私は今までもこんなに悩まずにすんだのに」 とのこと</p> <p>絵本を媒体として話せることは、担当者としても気持ち良かった。子どもの実態に合わせて使うよかつたこと反省</p> <p>教員自身がその子の困り感が特に大きくなることを気付けられる場となったこともあった</p>
その他	

1)『どっちも面白いんだよ』(3)変容

内容	記述
自分だけではない	<p>同じ悩みを持っている子がいるということを知った</p> <p>自分だけじゃないんだなー</p> <p>どっちも面白いんだねと思ったこと</p> <p>そのままでもいいんだ</p> <p>どっちも話すことは悪いことではない</p> <p>どっちも話さない→どっちもOKに</p> <p>「どっちも面白いの?」とかかかんにんしてきた</p> <p>吃音への罪悪感が軽減</p> <p>楽観的になった。今までよりも吃音というものに対して気が楽になったようである</p> <p>どっちも大丈夫と思えたようだった</p> <p>他にも吃音の人はたくさんいるんだから、気にしなくていい</p> <p>前向きになった</p> <p>受け入れるようになってきた</p> <p>治すことにごだわらなくなった</p> <p>隠さず、話すようになった</p> <p>吃音のことも話していいんだ</p> <p>考え方が変わったかどうかは不明。しかし、ことばのことに触れるのが楽になった気がする</p> <p>「あの本の子みたい」というようになった</p>
どっちもよい	
吃音のことを話す	

聞き手に 対して	少し吃音の真似をされたり、何か言われても平気になった 聞き手に聞き方をたのんでもいいと思う そつなのかと知ったという反応も多い はつきりかわかったとは判断はできないが何となく心のこっている感じを受ける
理解	

1) 『どもってもいいんだよ』 (4) 感想

内容	子どもの様子に関する記述
知識	ことばの教室ってどんなところか、知るためにもよい教材だと思う 「どもって何?」と子供から質問された。「ことばの調子」とか、「つかかえる」とかの表現を使っている 学芸会の話で共感できる子がいました 「どもっていいんだよ」を読んだから、次に「どもってどんなこと」を読み進めることが多い。「どもっていいんだよ」と一緒に読んでいくと、子どもたちの心の中に、自分の吃音について考えようとする気持ちが生まれるように、次に「どもってどんなこと」を読もうとときには、進んで自分の症状について話をしていくことが多くなった。一緒に吃音について考えていくきっかけ作りとして、この教材はとも使用しやすい 具体的に例が書かれていたことで、子ども自分と比べて「自分はね…」と自分の吃音のことを話し出す子がいた。吃音について話すきっかけとして、使いやすかった 吃音の話を始めるときにつけたり、絵本なので子どもの興味を引く。きみちゃんの話は、低学年のうちには(子どもによって)避けることがある 吃音についてはじめて話をするにあたり、吃音の話をすまきかけつくりになったと思います。本に具体例が載っていたので、「ぼくもこんなことあるよ。」と話しやすかったです 第三者的な視点で吃音に向き合うことができると思っています(自分だけじゃなくとも思っています) 4年生2学期で初めて自分の吃音を意識した子に読んでもあげたら、タイムリーに「ぼくと同じ」と言ってく教室でエピソードを話し出した 小さい時からのことも思い出して話してもいいんだと感じた子もいた いろいろな女の子の例が出てくるので、自分の学校にも、ことばの教室には来ないけど吃音の子がいるという話がでて(聞けたのは)よかったです 吃音に向き合おうとしていなかった子が、吃音のことをオープンに話していると思えるようになった 自校通級の6年生の男子、通級している子の中で一人、学校内でも一人だったので、陳外感をもっていった。この教材を使って、気持ちがあんなふうになった 周りに吃音の子がいない、自分だけだと思っていた子にとつて、心強かったようだ ことばの教室…特別なこと、というイメージの子がいたが、他のことばの教室でも、こんな感じなのか…という安心感を抱いた子がいた。まだ、吃音の話をすることを嫌がる子がいたが、この本をきっかけに、吃音の話をすることが増えた子もいた 情報を得たことで、少し安心して、自分の吃音に向かっているように感じた どの本もそれを使用した場合にすぐに変化がみられる子の方が少ないように思う。むしろ、あまり本質に触れた言葉でなく表面的な言葉で応答する子が多いと思うが、数日経つにつれて実感として生活の中で反響されながら自信のようなものへ変化していくのではないかとと思う 自分の吃音を受け入れられない児童だが、「気づき」はあるようなので、何でも言える関係を築きながら時間をみて再度読んでいきたい 「どうしてぼくはどもるのよ!」このことばは、なかなか言えない 子どもの実態と離れていて使いにくかった
子どもの 様子・気 持ちの変 化	
難しさ	

内容	担当者の意識に関する記述 前任校のミニグループで、この本をよみかきさせた際は、自分の吃音について話し合うきっかけができた。個別で読んだ時は、本人の反応が今一つだった。 本人の吃音意識、受け止め方、他人に話せるかなど、タイミングが重要だと感じた 導入というより、少し頼りなく、「話題にできる」と感じた頃を見計らって読んでいた。反応は様々。どの子にもいづれは読ませようとしている とても分かりやすく使えやすいが、使うタイミングを判断するのが難しい。子どもの気持ちや察したり状況判断を行ったりして使用していきたい 内容が分かり易く易く子どももサラッと読めた。向き合えない気持ちの時など、様子をきちんと見ながら使っていきたい
----	---

きつかけ	担当者の参考書としては○の教材も直接児童に提示するという場合と、こちらが参考にしてより対象児に合った教材を作る場合とがある。また、ことばの教室をはじめ担当する教員への研修などに使用することもある 自分から吃音のことを話すようにはならなかったが、吃音のことを担当者から話題にするきっかけになる本があることで、吃音について話題を話しやすかった 子どもに自分の吃音について語らせる機会が自然に作れた 自分自身の吃音に対する理解が深まり、伝えやすくなった 「どもっていいんだよ」ということはとても大切なことであり、吃音があっても大丈夫ということ、吃音はダメじゃないということなどを教えてくれるよい教材 子どもの気持ちを理解する教材として、ぜひ、家族、兄姉や担任にも読んでもらいたいと思う 本人には、共感でき、安心できる1冊だと思う 1番使っている。お母さん、先生方にも読んでいただきたい本No1です。よくお勧めしている 吃音のある子の気持ちかわかるのが良い 保護者との話で使用して、たいへん話しやすかった 保護者の吃音に対する認識が深まった 吃音の知識を担任に知ってもらえて良かった
その他	

2) 『どもってどんなこと』 (1) 児童の様子

記述から、子どもが絵本を受け入れていると考えられた内容	
絵本の場面	記述
(p.1)	最初のページで、自分と同じことごとばの教室に通っている子がいいることに驚いていた 「自分は、このパターンだ」「そうなんだ」と自分を振り返り、吃音を受け入れながら読むことができた 吃音のタイプの所を学習して、「自分はこのタイプだ」と自分から言っていた 3人の登場人物が個性がありそれぞれの役割分担で読んでみている 吃音のタイプを話し合うところでは自分のどもり方を客観的に見られた 繰り返し、引き伸ばし、つまり、ということばを知り、ぼくは○だと言っていた 吃音のタイプがあるとして驚いていた (p.10,11) 吃音のタイプを客観的にとらえ(つまりまることが多い等)、他児についても(引き伸ばしなど)話すようになった 高学年に使っている。吃音を意識するようになった子にとでも良いと思う。タイプの所→自分は「これ」と言っていた 吃音のタイプ→「私は繰り返しと読み返す」「ああ…」とかなるのを吃音とかどもりって言うんだ 「いつも学期初めは、どもりが増えるけど、波だから、夏休み頃には減る」ということを体得し安心していた 吃音の波についての場面→「ぼくは緊張すると吃音が出やすい。」「指名された時に多い。」 「吃音のタイプが同じだ」「緊張すると吃音が出やすい。」と話しした 「波がある」のところでも→表があるので、それを指して、「今ここら辺かな」と言っていた 「少しづつ一緒によみ進めていった。自分の吃音と比較して「僕の場合は…」と吃音の波をグラフに表した 吃音のタイプの所を学習して、「自分はこのタイプだ」と自分から言っていた。吃音の波について、「あるある」と同感していた 波の場面→「ぼくもある」と自分から話し始めた 波があることが分かった 吃音の波について学習した際、自分の吃音の波も考えることができた 吃音が治るという考えを深く考え、本人なりの答えを出すことができた 吃音が治るといことを考えさせると、○全くもたずスラスラ話せるようになること○どもっていても言いたいことを伝えられるの二通りに促される子がわかれた いつの間にかどもりなくなると驚いた 「治りにくくことを初めて知った」と驚いていた 「吃音がある」とは「どこかでは自分ではどんな考えか、時間をかけて話し合えた 「どもっていても、どんな仕事でもできるんだね。できない仕事があると思っていた」 「仕事についてページで、どんな仕事でもできることを知り笑顔になった 職業のページ→なりたての仕事について安心感をもった様子が見られた 職業のところ→「どんな仕事でもできるんだ!」と驚いていた
吃音の波 (p.12,13)	
吃音がな おるとは (p.16,17)	
やれない 仕事はな い (p.32,33)	

吃音のある人は世界中にいます (p.34,35)	<p>高学年の子が将来の仕事について関心があり、ふれられてよかったです</p> <p>「自分以外にも子どもがたくさんいるんだ」と言って、ほっとした様子だった</p> <p>吃音のある人が世界中にいますということを知り、驚いたようだった→家に帰って、その話をした</p> <p>100人に1人もいないんだと思っていた</p> <p>100人に1人もいないんだと驚く子どもが多いのが元気になる</p> <p>吃音のある人が日本には100万人くらいいることを知って驚いていた</p>
吃音の研究者	<p>研究した人がいることに興味津々だった</p> <p>「私ものに驚いて感じると同感した</p> <p>P.20～23では、友だちがテンポのよいやりとりをする中で、自分が入ると、その流れが、いきなり止まってしまふ心苦しさを初めて言った</p> <p>「学校で困っている場面」に同調していた</p>
吃音で困ること	<p>吃音のタイプ、原因、波について読み進めていくことで、「知りたいことがわかった」と納得した子もいた</p> <p>吃音のタイプや吃音の波など、自分のタイプやどのような時に吃音が出るのか、考えることができた</p> <p>吃音のタイプや波のコラムで、「自分はこれだ」と自ら語ってくれたようだった</p> <p>自分の吃症状と比べながら読み進めた。自分と同じ状態のところは、うなずきながら納得している様子の方が多かった</p> <p>共感し、自分でもある場面やその時の感情について話す場面が増えた</p> <p>絵本の内容をきっかけに、自分のことを(吃音の症状や困り感について)自分から話し出した</p> <p>吃音について波があること、種類などについて、私の場合は…などと言いきりながら興味深く聞いていた</p> <p>吃音についての知識を拡げるために使っている「ぼくは連発かな」「ぼくも調子のいい時とそうでない時がある」など、自分の場合と比べて理解を深められている</p>
タイプ・原因波・原因波・おこなっている仕事などの知識全般	<p>言葉について児童の側から話し始めた。(もともと話題にはしていました。)</p> <p>例「ぼくは、く、くとかはならないけど、くーとかはなる。」等</p> <p>「吃音がおおるとは」について、人によっていろいろな考え方が存在することについてふれたり、将来いろいろな仕事についていたりする話題にふれた時に「自分はこうだと思う」「初めて知った」という反応が見られた</p> <p>「そうなんだ」と自分が知らなかったことに対して驚くことがあった</p> <p>「吃音のタイプ」で「ぼくはACBがあるよ」「100人に1人ぐらいいる」という話で「日本には100万人もいるの?」「他の国にも吃音の人っているんだ」と自分のことを話したり、驚いたりしている様子だった</p> <p>吃音ということばや、吃音の症状を表すことばに興味を示す高学年が多かった</p> <p>読んで納得していた。得た知識を親にも話していた。</p> <p>折に触れて、吃音の正しい知識を伝えたいと思うが、この本のおかげで、具体的に話ができたとと思う</p> <p>この教材をもとに、吃音に関するクイズを作った発表会でみんなの前で披露した</p> <p>内容をクイズにしてグループでやり、その後話し合った</p> <p>自分の吃音の様子をどう表現していいか分からなかった子が、「これと同じ」と表現できた</p> <p>「あるある」とグループ活動では、色々なところで声がかかった</p> <p>自分のことを話しやすいようだった「ぼくもそう」のように話し出した</p> <p>似た例があると、「自分も同じ」と話をした(小12男子)</p> <p>「ぼくもこうなことがあるんだよ」と自分のことを振り替えられるようになった</p> <p>登場人物のことばに「いっしょだよ」と言う子も多かった</p> <p>自分も同じと自分から話し始めた</p> <p>自分も同じ、こんなこともあるよ、と話がふくらんだ</p> <p>6年生にとっては、絵本の主人公を自分のこととして感じられたのが「そだなあ」とつぶやいていた</p> <p>「私も幼稚園の時にいいにくくなった。」「私もくりかえす」等、共感的な態度だった</p> <p>読んでその時は反応がなくて、後々「あれから、自分はどうかな〜って思ってた」と話してくることがあった</p> <p>「ぼくも同じだ」「ぼくの場合は違う」など、自分から話し始め、吃音について話が具体的にできた</p> <p>「自分も〜」と自分に当てはめて話し始めた</p> <p>自分と比べながら読み、自分はどうかを見つめられるようになった</p> <p>自分と同意見であったり、違う意見であったり、確認して見ました</p> <p>自分の吃音と比較して、「ぼくは…の方がだと思う」と話す子があった</p>

児童自ら、「自分は〜だった」と話した	<p>登場人物の質問に対して「自分もそのことを知りたい」と興味を示したり、一つ一つの説明に対して「これはある。」「これはないな」と自分のことを説明した</p> <p>「きになければいいんだ」と児童が気づいた様子がみられた</p> <p>絵本なしで話し合った時よりも反応が良く、自分の体験を話してくれた。吃音について話すきっかけになった</p> <p>吃音についていえあまり話したことがなかったもので、話すきっかけになったようだ。(お母さんと話した。)</p> <p>保護者も「子供と話すきっかけになった」と言っていた</p> <p>「〜は、どう?」と内容について質問してきた</p> <p>「こいつ本があるんだ」と感心していた。意外だった様子</p> <p>保護者が購入されたところ、児童が「何か言われたら、この本を読んでも」と渡すと言っていた</p>
--------------------	--

記述から、保護者や担任、担当者が絵本を受け入れられていると考えられた内容

母親が読み、父親にも読ませたいと言った	<p>「吃音が治るとは」については、本人だけでなく、担任や保護者にも話すのにとでもいい内容だった</p> <p>保護者が抱える不安や悩みが軽減された</p> <p>症状や波の話では、共感する子が多い。治ることや吃音に対しては、疑問に感じたことが分かってすっきりしたと言われたようだった</p> <p>保護者から「わかりやすい」と言われた。今まで分からなかったこと、疑問に感じたことが分かってすっきりしたと言われ、喜ばれた</p> <p>担任「読んでみたいと言われた</p> <p>吃音の症状や直りにくいことの説明に使いやすい</p> <p>在籍校訪問で、接し方のポイントをお話する時の資料として使いわたりやすかったと思う</p>
---------------------	--

記述から、子どもが絵本を受け入れられていると考えにくい内容

表情にこぼれた様子があったので、使用は休み、しばらく時間をとることにした(小1 男子)	<p>平静を装っていた子がいいた</p> <p>どもも自分を受け入れるとわかったことが、子どもにはピンと来ない様子だった</p> <p>知識的なことには、大いに興味を示し、読みたがるが、「どう考えるか、吃音に対して何ができるか」などは、難しいのでページ順ではなく、後半にやっている</p> <p>「どももいいんだよ」の次に使用</p> <p>低学年の児童にはややむずかしいケースもあったのでピックアップして使用</p> <p>「どもも」で、どんなときに困ったのかについて、「ない」と言い、場面をイメージできなかった</p> <p>左記の教材(どもも)よりもいいんだよ)に比べ、見た目、文字が多いと感じるらしく、2年か3年のケースだったが拒絶されたことがあった。与え方を工夫した(1例にすぎないが)</p>
---	--

記述からは、子どもが絵本を受け入れられているかどうか判別しにくい内容

絵本の場面	<p>記述</p> <p>「吃音の原因がまだわかっていない」場面を読むと「なんだ。そうなんだ。」と残念そうにしていた</p> <p>吃音の原因が分かっていないこと、治らないかもしれないと知って、残念に思う子もいた</p> <p>治らないかも、というところで、しばらく黙ってしまった子がいた</p> <p>「吃音の原因はわからない」→「えーわかると思った。わかんないかい!」等の反応があった</p> <p>どももなのっておもしろいの?など、少し首をかしげて、「なぜだろう」と言った</p> <p>「治らないんだね」と言い、担当者が読み上げた後も、注目して見るページもあった</p> <p>「へえ、そうなんだ」と反応する</p>
全般	<p>「ふ〜ん」と感じ。知識が多いので「知りたい」と思っている子でないと、ざっと読んでしまうことが多い</p> <p>最後まで読んで「へえ」という感想だった</p> <p>静かに聞いていたが、途中からあくびをしたり、時間をきにしたりしていた</p>

途中から少し飽きてしまったがほぼ全部一緒に読んで読んで
「すぐくすくす」がどても使いやすいので、この2冊を指導でじっくり一緒に読むことができている。児童の療育施設(福祉センター)の先生がこの本を使用して入級前に対応されているようで、保護者も子どもたちも「あ、これ見たことある」という反応をよくしている
読み終えたと別の話を始める

2)『どもるってどんなこと (2) 使用効果

内容	記 述
子どもの様子	自分が思っていたことと違っている所にびっくりしていた 自分のせいや親のせいではないとわかった。吃音について具体的に知ることができ、自分から吃音のことをよく話すようになった 吃音の簡単な知識を得ることで情緒的に落ち着いてきた グループ活動でも吃音の話し合いを楽しみにする子が増えた 自分以外にも、同じように子どもの存在を知ったことは、大きいようだった(グループ指導未経験、新入児童の場合) 吃音があることは嫌だが、「吃音は悪いことではない」と肯定的に捉えられるようになった 担当や仲間(同級生の吃の子)と読み進めていくうちに、友達と自分のどもり方の違いを発見した 「私の場合ね…」という前置きで話すことが増えた。「人それぞれ」に気付いたのだと思う 自分の思いと異なっている内容について、自分は違うと話した ほかは、これだけというふうな自分のタイプを想起して考え、当てはめていっているよう姿がみられた めがねをかけている人はめがねがトレードマーク。自分は吃音がトレードマーク 「どもる」「吃音」ということがわかった 自分の吃音についてこの本に書いてあるのと同じだと感じていた 「どもる」は、癖なの? 病気の? 障害なの? と自分の方から尋ねてきた 子ども自身の疑問が解決された 吃音博士というところが気に入って、専断にスムーズにながった この絵本をきっかけに、吃音のことを日常的にはなせるようになった子がいた。自分だけじゃないのだと思えたようだった。初回相談の児童との会話にもヒントをもらった 自分だけが吃音でないと気づくことができた 吃音のタイプ、波…など、吃音の知識を学べるテキストのようなもの。高学年の子とは、初めて知ったことなど、ノートに書きながら知識を深められた この本を参考に学習発表会で吃音のことをとばの教室みんなに発表できた 吃音についてとばの教室の先生方が作った教材があるということが、子どもや保護者、担任に好意的に受け取られ、信頼関係が増すという面があったと思う 保護者から「日本中の」に、このことを知ってもらえたら私は今までこんなに糧にすんだのに」とのこと 「いいんだよ」と同じで、きつかけ作りによいのと、吃音の基本的な知識を児童に分かりやすく書かれていいるのがよい
その他	

2)『どもるってどんなこと (3) 変容

内容	記 述
自分だけではない	吃音があるのは自分だけではないということに気づけた様子だった 自分だけではないと安心した 自分だけじゃない、どもって大丈夫だ 世界にもいる スラスラじゃなくてもいい 吃音があること、通級していることをクラスの友達に内緒にしたいと言った子が、担任からみんなに話してもよいと言った 吃音の波について、増えなくても「まあ、仕方ない」と捉えられるようになっていった 自分の癖だと言った 吃音は自分のひとつ どもっていいんだよ

	「気にしないで、話してみよう」と言い始めた 悪いことだと捉えなくなかった 吃音は悪いことではないと考えられた 「治したい」→「このままでもいい」 どもることを恥ずかしがらなくなってきた 吃音への罪悪感が軽減 暗黙の了解でタブーだったものが解放された 自己開示するようになった 考え方が変わったかどうかは不明。しかし、ことばのことに触れるのが楽になった気がする 波を自分で表現できるようになった 少し吃音の真似をされたり、何か言われても平気になった 納得(安心)した様子 吃音を気にしなくなってきた 肯定的に捉え、気にしなくても良いと知った 表情が明るくなったこと どもりやすいことばを教えてくれた 他の吃音に対する質問をしてきた 吃音についてもっと知りたという興味が強くなった クイズに取り組み、吃音について正しい知識を知ることができた タイプや波があるということを理解できた たくさん話す仕事にも就けるんだ 仕事に限られている→どの職にもつける いろいろな仕事ができることがわかった。有名な人がいろいろいるとわかった 「どもりたくない」と思っていたのではないと思っていたが、そうではないことがわかったと言っていた子がいた 「私、別に気にしていないんだよね」と困り感の減少をしてくれたお子さんがいた 吃音について客観的に知る中で、吃音とどうつきあうか話し合えるようになった そうなのかと知ったという反応も多い はつきりかわかったとは判断はできないが何となく心にとこっている感じを受ける
吃音のことを話す	
聞き手に対して	
安心	
知識・理解・発展的内容	

2)『どもるってどんなこと (4) 感想

内容	子どもの様子に関する記述 子ども自身が、同じような吃音をもっていている人が他にもたくさんいるとわかったことは良かった 特にもっている人がいるような職業につけているといって感動したようだ 将来の見通しや職業についての話にも触れられて、子どもにも分かり易く、吃音の知識を増やせた 子どもより吃音の症状について話そうになった。吃音が治ることへの考え方を深めることができた 吃音者の職業がわかり、希望をもつ子がいた この本を通して「吃音があるのは自分だけでないんだ」「吃音のある人でたくさん話を仕事に就いている人がいるなど、やれない仕事はない」ということを感じるようになった 「吃音の原因や「吃音の治療」について、もう少し具体的に知りたいたいという子が多かった。子どもの「どうして?」という気持ちや「治るの?」という気持ちにこたええるために、簡単な研究歴や吃音治療の現状も絵本の中にあるかと思っている 子どもと一緒に「吃音とはどういう物を学ぶ資料として使っている。子どもが、登場人物を見て、「あ、自分と同じだ!」「ひたひたはいいんだ!」と安心する様子が見られることもあった 第三者的な視点で吃音に向き合うことができる(自分だけじゃないと思うことで、話題にしやすい)。マンガのような吹き出しややりとりで知識が得られるので、良かった。子どもにとっても読みやすい本を元に、子どもが自分を振り返ることができた 子どもにも分かりやすい内容で、反応が返ってきたので良かった グループ活動で用いた際「自分はくり返し多い」「セリアの時は自分は平気」等のみんなが自分の吃音のことを自分のことばで表現するいきつけになったと感じました
知識・理解	
吃音のことを話す	

担任の先生に理解してもらえた
私自身難言の経験が浅いため、吃音を理解するのに役立った

子どもの特徴・気持ちの変化	<p>自分だけではない、世界中にいろいろあることを知り、子どもの心が少し軽くなったように見えた</p> <p>「どってもいいんだよ」を読んだから、次に「どももってどんなこと」を読み進めることが多い。</p> <p>「どももっていいんだよ」を一緒に読んでいくと、子どもたちの心の中に、自分の吃音について考えようとする気持ちが生まれるよう。次に「どももってどんなこと」を読むときには、進んで自らの症状について話をしてくれることが多くなった。一緒に吃音について考えていくきっかけ作りとして、この教材はどても使いやすい。</p> <p>吃音に向き合おうとしていた子が、吃音のことをオープンに話していいと思えるようになった</p> <p>どの本もそれを使用する際にすぐに変化がみられる子の方が少ないように思う。むしろ、あまり本質に触れた言葉ではなく表面的な言葉で応答する子が多いと思うが、教日経につれて実感として生活の中で反芻されながら自信のようなものへ変化していくのではないかと思う</p> <p>4年生以上の子どもたちのところに深く入るようだ。家族や担任の先生のこと書いてあるのいい</p> <p>「吃音が治るとは」の上二つの部分は、理解できた。下二つの部分は受け入れにくかった</p> <p>吃音について学ぶきっかけになった。「治る」についての考え方「どもも自分を受け入れる」「自分の吃音を語る」ことの難しさも感じた</p>
難しさ	
内容	<p>担当者の意識に関する記述</p> <p>その子に応じて使い方を変えている</p> <p>導入というより、少し詳しくなって、「話題にできる」と感じた頃を見計らって読んでいる。反応は様々。どの子にもいづれは読ませようとしている</p> <p>どても分かりやすく使いやすいが、使うタイミングを判断するのが難しい。子どもの気持ちを察したり状況判断を行ったりして使用していきたい</p> <p>これらの教材については、担当している子どもたちにもどのタイミングで示したらよいか検討しています</p> <p>少し深めたい子に使える。ロールプレイや役割を決めて読むのに使える</p> <p>会話のところを子どもと役割をつけて読んだり、まとめのところを学習的に読んだり、色々な読み方ができて良かった。どても分かりやすく書いてあり、読みやすい</p> <p>子どもも体験に重なることや疑問に思うことがたくさん書かれているので、その子の状態に合わせて使えた</p> <p>大体見開きぐらいで一つの語になっていること、下に知識のような項目があることが良い。「治るとは」が真ん中ぐらいにあるので、子どもによっては、飛ばして他を深めてから、最後にその部分に触れるようにしている</p> <p>ことばがわかることについて知りたいという気持ちにこたえてくれるようで、子どもたちが読んで知りたいたいと思えるきっかけとなる</p> <p>低学年から高学年まで使えてどても良い内容。吃音の話のきっかけや場面作りになり、理解と受容をうながすのにも役立っている</p> <p>自分のことばに向き合うきっかけになった</p> <p>吃音の知識的な部分についてふれるきっかけになりました。主に高学年や中学年の児童と使いました</p> <p>博士が先生、担当者も児童と一緒に教えてもらうようなスタイルで、一緒に読んでいく一体感がもてる</p> <p>吃音について一緒に学ぶための教材として、どても良いと思った</p> <p>基本的なことをしっかりと伝えられるので助かる</p> <p>絵本になっているので、抵抗なく読み進めることができた。吃音のことが分かりやすく書かれていて良い</p> <p>気軽な雰囲気でも読み進められるところが特に良かったと思う</p> <p>大人にとっても入門として気楽な気持ちで向き合えた</p> <p>大変助かっている。内容もさることながら、イラストも親しみある絵なので、子ども大人も手に取りやすい</p> <p>絵本という教材があまりないので、低学年の児童に取りかかるときに使いやすい</p> <p>子どもの気持ちなどが吹き出しで書かれているので、読みやすく、感想が言いやすいようだった</p> <p>吹き出しのことばが、その人物らしく、わかりやすい表現になっていて、好感が持てた</p> <p>指摘されたりすることに對して当事者の心の声が文字とよって表されて共感しやすい</p> <p>少しずつ丁寧に読み進んでいくことで、子どもの気持ちや考え方がわかる</p> <p>吃音に関する情報や、コラムとしてまとめられているので、お子さんの気になっている点が多からえやすかった</p> <p>吃音は、心理的なことが多いので、ことばの教室では、リラックスさせるようにしている。</p> <p>保護者との話でも教材でたいへん話しやすかった</p> <p>「どうして話でこうかという話し方なの?」と面と向かって自分の子に聞かれ、保護者から「どうしましよう」と相談があった。その際、保護者にも教材を見せ、説明しやすかった</p>
きっかけ	
その他	